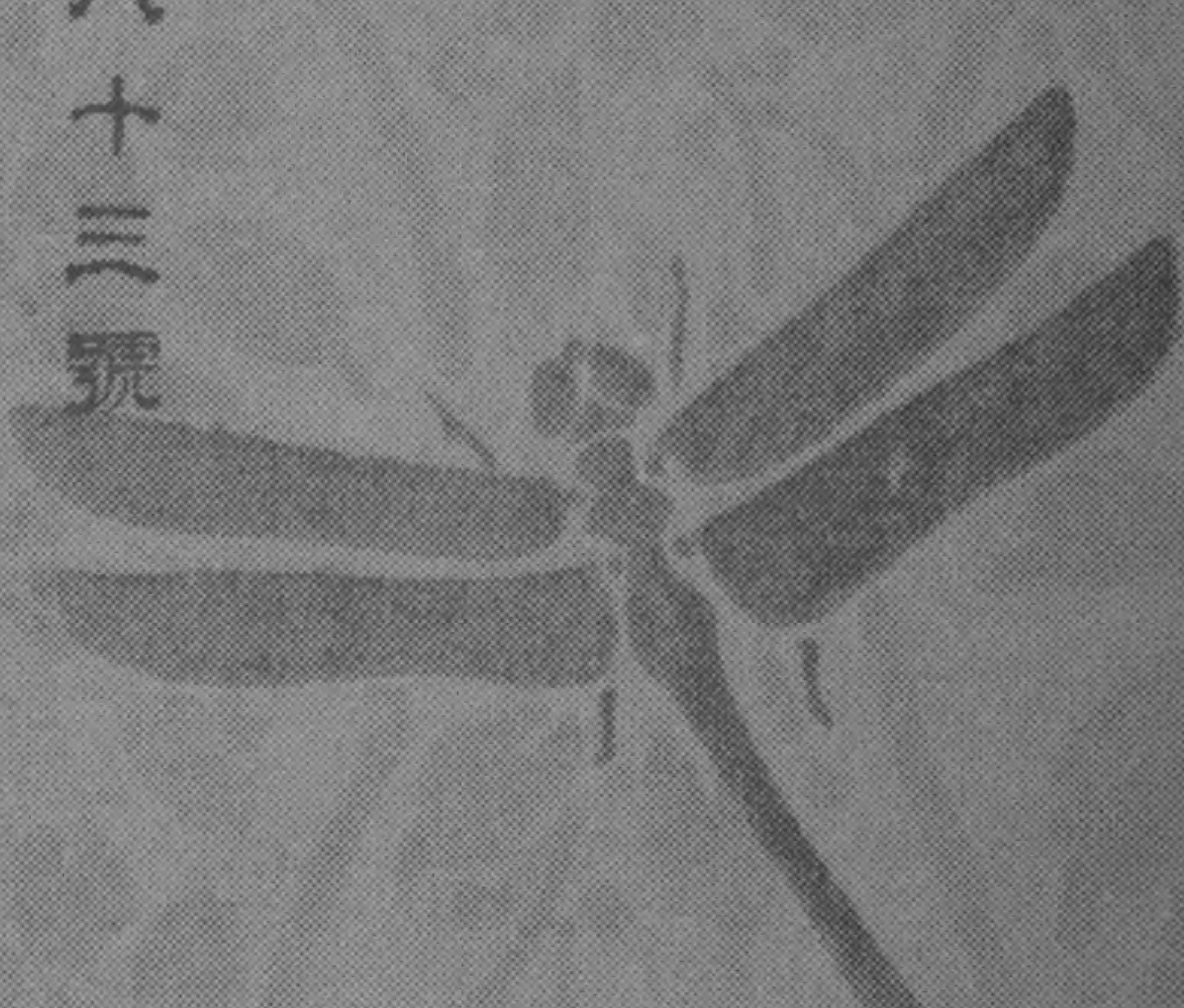






女鑑

明治二十八年三月二十六日發行

第八十三號

東京國光社

女鑑第八十三號目次

眞間手兒奈



戰後婦人の任務

我が國の、清國と、戰を交へてより以來、皇軍のむかふ前には、敗れざる敵はなく、戰へば、かならず勝ち、攻むれば、かならず取り、堅牢なること、比なしと聞えたる旅順、威海衛の砲臺も、或は、これを占略し、或は、これを破壞し、精鋭なること、雙なしと聞えたる北洋艦隊も、或は、これを轟沈し、或は、これを捕獲し、陸上に、海面に、大捷を得ずといふことなし。これ、まことに、我が國の重大慶事、國民たるもの、よろしく、大に祝賀すべき時なり。この大に祝賀すべき時にして、而も、いまだ、戰の、局を結ばざる前にあたりて、はやく、戰後の事をいふは、或は、早計に失する嫌なきにあらずといへども、こ

れを、今日に講究するは、あながち、無用の事にあらざるを信ず。故に、吾人は、天下の婦人諸子にむかひて、戰後、婦人の任務は、いかなるものなるかを、あらかじめ講究し、未然に、注意をこはんとするなり。

いま、內外古今の史紀に徵するに、戰後必有の弊として、惡疫の傳播、風紀の紊亂等、最、かなしむべく、最、いとふべきことありて、殆、避くべからざるものゝ如し。

すべて、交戰中は、從軍者の病死するもの、戰死するものに倍蓰し、將帥たるものゝ、大に憂慮するところなりと雖、戰後、惡疫傳播のために斃死するものゝ數は、從軍者の戰死、病死の數よりも、なほ、はるかに、多數にして、甚しきにいたりては、これに、幾十倍することありて、實に、慘狀をきはめたることもありきといふ。現に、今日にても、各地より、吾人をして、婦人諸子と

ともに、寒心せしむる警報をつたふること、頻なるにあらずや。
また、戰後、風紀紊亂の恐あることは、戰勝國、戰敗國をとはず、ともに然りといへども、ことに、戰勝といふ大名譽を擔へる國民の上には、常に、ありがちの弊事にして、これ、はた、やむを得ざる通患なりとす。今や、我が國は、將に、この地位に立たんとす。いかんぞ、豫め、心せずして可ならんや。
惡疫の傳播、これを、未發に防ぎ、風紀の紊亂、これを、未然に遏むるは、もとより、賢明なる當局者のあるあれば、吾人は、心を安んじ、慮を省きて可なるが如しといへども、これ等のことは、當局者のみに依賴すべきものにあらず。かならず、國民たるもの、各自、これを防遏する心掛なかるべからず。ことに、常に、家室にありて、家事を理むる婦人たるもの、この心掛なくば、當局者、いかに、心を苦め、慮を焦すとも、何の甲斐かあらん。されば、婦人諸

子は、たゞに、これを、心に掛くるのみならず、なほ、進みて、これを以て、全く、己の任務となし、充分に、これを防遏すべき方法を、今日に講究せさるべからず。

それ、悪疫傳播のもとは、おほくは、衣食住の三のものに在り。而して、衣食住をつかさどるものは、婦人なり。されば、婦人にして、そのつかさどる衣食住の三のものに、ふかく、心を留め、意を注ぎて、悪疫の傳播を防ぎたらんには、その効果は、大に見るべきものあらん。吾人は、婦人諸子の、よく、その任務にたふるを信じて疑はざるなり。

風紀紊亂のもとは、もとより、種々あるべく、一々、こゝに掲ぐるあたはずといへども、婦人諸子、はじめより、これを遏むるに意あらば、いかでか、紊亂の弊を少くすること能はざるべき。かつ、また、或る場合には、その効果は、

遠く、當局者の右に出づることあるべし。こも、亦、吾人の、確く信ずるところなり。

上來述ぶるが如く、戰後、婦人の任務は、惡疫の傳播を防ぎ、風紀の紊亂を遏むるにあり。あはれ、天下の婦人諸子、一意專心、力を、その任務をつくすに致し、顯著なる効果を奏して、戰勝國の名譽をして、未來永遠に全からしめ、我が國の光を、世界萬邦に輝かさしめんことをつとめよ。たとひ、外に、戰に勝ちたる名譽は得とも、內に、これを全からしむるものなくば、いかんともするなし。若し、かくの如きことあらば、婦人諸子たるもの、當に、責を負はざるべからず。いかに恥づべきことならずや。

故に、吾人は、戰後のことを、今日にいふは、早計に失する嫌あるにもかゝはらず、更に、これを顧みずして、戰後婦人の任務を講究し、あはせて、注意をこ

はんとするなり。婦人諸子、その心して、これを讀みたまひね。

論說

淑女となるべき捷徑

松野操雄

學術あるもの、淑女といふを得べきか。しからず。藝能あるもの、淑女といふを得べきか。しからず。才智あるもの、淑女といふを得べきか。しからず。麗容あるもの、淑女といふを得べきか。しからず。財産あるもの、淑女といふを得べきか。しからず。身分あるもの、淑女といふを得べきか。しからず。以上の二、もしくは、三を兼ぬるもの、淑女といふを得べきか。しからず。四、もしくは、五を兼ぬるもの、淑女といふを得べきか。しからず。こと〴〵く、之を兼ぬるもの、淑女といふを得べきか。しからず。

學術、藝能あるものは、その學藝を恃み、人を凌ぎて、淑女たる德をそこなふものなしとせず。才智あるものは、その才を恃み、麗容あるものは、その容を恃みて、婦德をまもらず、學藝ををさめずして、淑女たることあたはず。財產あるもの、身分あるものは、その財產、はた、身分を恃みて、人に誇り、學ぶべきも學ばず、習ふべきも習はずして、生を過ぐすものおほし。いかでか、淑女といふを得べき。ゆゑに、吾人は、學術、藝能、才智、麗容、財產、身分の六を、ことごとく、併せ有てるものといへども、淑女たることをゆるさず。況、その一を缺き、二を缺くものをや。また、況、その他をや。

然らば、いかなるもの、果して、淑女といふを得べきか。淑女とは、淑女たる資格をそなふるものをいふなり。然らば、淑女たる資格をそなへんには、いかなる方法を以て、捷徑とすべきか。いはく、その方法、たゞ、一あり。これ、他

にあらず。嫉妬の念を去るに在り。たゞ、嫉妬の念を去るに在り。

それ、嫉妬の念は、男と、女とをとはず、一般人類に、かならず、ある弱點にして、この念なきものは、絶えてあることなし。ゆゑに、吾人は、嫉妬の念あるを以て、一も、二もなく、これを排斥するものにあらず。この念を去らざるものを排斥するものなり。されば、よく、嫉妬の念を去りて、全く、痕跡なからしめたるものを稱して、淑女といふべし。また、吾人は、上に列べ記したりしうちの一を有てるものにして、嫉妬の念を去りたるもの、なほ、淑女といはんとす。況、三四、もしくは、五六を兼ぬるものにして、この念を去りたるものをや。世の嬢達、果して、淑女たらんことを冀ひたまはゞ、嫉妬の念を、去りたるが上にも、なほ、去りたまへかし。吾人は、絶えて、嫉妬の念なきものに與ふるに、淑女といふ最大美名を以てせんとす。

女子處世論（十八）

三輪田眞佐子

第十七　長所を養ふべし

そも〳〵、梅の愛でらるゝは、その香、ゆかしければなり。玉の尊ばるゝは、その光、うるはしければなり。あるは、犬馬の養はるゝは、一は、盗を戒め、他は、物を運べばなり。若、これらにして、かゝる長所なからんには、たれ顧みるものあらんや。蓋、こは、宇内の大原則なれば、あらゆる物相、たれなりとて、これに背き得べきものかは。故に、人は、老若男女、各、その分限に從ひて、その心、及、身の長ずる所を恃むべきなり。長ずる所なきものは、世に容れられじ。長所は、多く、天倫によりて定まるめり。されば、女子を教育するには、必、女子の天倫に從ひ、そのおのづからなる長所を、いよ〳〵養ふべきなり。これま

で、女子教育上、好結果少かりしは、その天に適せざる所やありけん。おもふに、女子の、主なる長所は、良妻賢母の職分を盡すに足る特性にあり。果して、かゝる主義が實踐せられんか。勢、目下、女子の就學者、曉天の星をみるごとく少きに引きかへて、教育を受けざる女子は、娶るものなきほどに至らん。邦家の幸、これよりなかるべし。今や、我が民人は、立ちて、東洋の天地を支配し、進みて、世界文明の魁たるべき天職を負ふなり。故に、今より、一層、強國の基なるべき女子教育を忽にすべからず。

もし、特別の女子にして、家政を行ふ餘力を以て、他の業をなさんとならば、繪畫、音樂、及、刺繡などの美術、又は、一般の文學等、天倫に相當するものに限るべし。そは、女子の長所なればなり。亦、よし、實際は、その人の天材

ならんも、まだき、世の信用を得ざるものは、その短所に従事すると等しき結果を得ん。今日、わが國の女醫の如きは、男子と共に、競爭試驗を終へて及第せしものなれば、女子の智識は、決して、男子と異なることなきを證明するに足らんも、いまだ、世人の信用薄きを以て、頗、困難ならん。されど、もし、ながき修業の間に、一旦、不品行に陷らんか。反りて、女子社會に、汚辱をおよぼすに至らん。文學の如きも、その長所なりとて、良妻賢母となるなどの長所を忘れなば、亦、困難を來さん。大鏡に、高內侍の文才を評して、女の、あまり、才かしこきは、ものあしと、人の申すなるに、この內侍、後には、いと、いみじう、墮落せられにしも、そのけとこそ、覺え侍りしかとあり。そは、大抵、文事に長ずるものは、家事の長所を忘るゝもの多ければなり。

人は、その形の相異なるやう、その性質、教育、位置、及、境遇も異なるべきなり。逐一、その世に立つ材量をみるに、女德、才藝、財產、門閥、美貌、甚しきは、世辭よき愛嬌、因緣となりて、世に處するもの多きぞかし。されど、悉、斯の如き材量を、一身に集め居る女子は、勿論、最上の幸福を行はんも、萬人の望むべきものにあらず。つら〱、見よ。美貌のみを利用する人は、娼妓と、類を同じうするものなれば、末年は、必、不幸ならん。才藝のみを利用するも、女德の具はらざるときは、亦、不幸の境界に陷らん。財產のみを利用するも、決して、幸福の道にあらじ。古詩に、富家女易嫁、嫁早輕其夫、貧家女難嫁、嫁孝於舅姑。とあり。反りて、女德の修らざる原因となることも多からん。さりとて、女德のみ全からんも、智識なければ、世の任用少し。唯、女子處世の材

量の中にて、女徳は、眞髓なることを忘るべからず。その他、世辭よき愛嬌あることのみを利用せんとし、或は、一門の勢力を假り、世に處せんとするは、さながら、草葉における朝露に異ならず。危いかな。要するに、世に、よき位置を占め、安樂の生涯を遂げんとするもの、偶然を期するなかれ。故に、能く、身を處せんと願ふものは、日に、月に、いそしみはげみて、有益、且、有徳の長所を増さゞるべからず。唐の梁伯鸞の妻孟光は、姿、甚、見にくかりけれど、女徳を養ひて、自、長所を作りしかば、その芳名、後の世までに傳はりしなり。おのれのいふ長所は、虚飾、姦計、及、詐術などの不德なる殊性を指すにあらず。諸孃をして、人の地位、境遇は、僥倖少きを知らしめんため、古今、世人が處世の材量となしゝ例をば述べしに過ぎず。換言すれば、日本女子は、日本女

子固有の長所あり。決して、外國女子の長所を學はず、能く、應分の夫につぎ、相當の生活をなすこそ、幸福なれとなり。鴨の長明曰はく、かうなは、ちひさき貝を好む。これ、よく、身を知るによりてなり。みさごは、荒磯に居る。すなはち、人をおそるゝが故なりと。これ、亦、分限を知らざるものと、思ふべきことにこそ。

史談

眞間の手兒奈

大町桂月

忍が岡、飛鳥山などに上りて、東の方を望みたまはゞ、平野の中に、一堆の丘樹の横はれるを見たまはむ。これ、やがて、有名なる鴻の臺なり。此の丘は、もと、里見氏の城ありし地にして、北條氏と、里見氏との戰爭ありけるが、その時、里見氏、

木にやぶれけり。今は、城跡もなくなりて、草木、いたづらに、深く、孤墳、雨にぬれて、陰鬼、夜哭するも、いと、あはれなり。

此の丘の南側に、さゝやかなるほこらあり。手兒奈明神といふ。こは、眞間の手兒奈を祭れる處なり。里見氏の敗跡を弔うて、懷古の涙に咽ぶと共に、また、手兒奈の昔をおもうて、袂をしぼらざるものはなからむ。そも、手兒奈は、如何なる人なりしか。かくばかり、神とまつられ、人に尊ばるゝを見れば、人にすぐれたる德なくばあらず。茲に、その由來を尋ぬるも、徒事にはあらざるべし。

眞間とは、その地の名なり。手兒奈とは、美しき女といふ意なり。眞淵翁は、「てこ」は、「はての子」といふ意、「な」は、女なりと解かれたれば、宣長翁は、愛兒の意なるべし。ほめたる稱なり。「な」も、ほめていふ語なりと解かれぬ。宣長翁の說、穩當なるが如し。馬琴は、また、「てこな」とは、關東にて、女を稱する方言なりといへり。余は、しばらく、日本大辭林の解釋に從ひて、美しき女と解し置くべし。されば、手兒奈明神に祭られたる眞間の手兒奈は、眞間の里の美女といふことにして、女の名にはあらず。かく、神とあがめられたる烈女なるに、唯、眞間の手奈兒との

み知られて、其の名を傳はらざるは、惜しむべきことゝもなり。眞間の手兒奈が、始めて、書に見えたるは、萬葉集の歌なり。その中に、眞間の手兒奈を咏みたる短歌は、いと、多けれど、長歌は、唯、二あり。其の一を、山部赤人の歌となし、他を、高橋蟲麿の歌となす。赤人の歌にいはく、

いにしへに、有りけむ人の、倭文機の、帶ときかへて、伏屋たて、妻問ひしけむ、葛飾の、眞間の手兒奈が、奥津城を、こゝとは聞けど、眞木の葉や、茂くあるらむ、松が根や、遠く久しき、言のみも、名のみも我は、忘らねなくに。

反歌、二あれども、くだ〳〵しければ略す。この歌にては、手兒奈の事跡は更にわからず。また、面白き歌にもあらず。總て、赤人の歌は、言葉のつゞけざま、實に巧なれども、人を動かすに足る大詩想あるにあらず。後世、人丸と、赤人とを並稱して、歌聖といへど、赤人は、人丸の如き熱血なく、詩想なく、縱横奔放の筆もなく、人丸の下にあること、數等なり。さて、此の歌にて、眞間の里に、手兒奈の墓ありと聞きたれど、その墓の所在がわからぬといふことは、知らるゝなり。赤人の時、已に、その墓がわからぬくらゐなれど、眞間の手兒奈は、よほど、古の人なり

しことも、知らるゝなり。蟲麿の歌にいはく、
とりが鳴く、吾妻の國に、古に、ありけることゝ、今までに、絶えず云ひくる、勝鹿の、眞間の手兒奈が、麻衣に、青衿着て、直佐麻を、裳には織りきて、髪だにも、掻きは梳らず、履をだに、穿かで行けども、錦綾の、中につゝめる、齋兒も、妹に加かめや、望月の、みてる面わに、花のごと、咲みて立てれば、夏蟲の、火に入るがごと、水門入りに、船こぐ如く、ゆきかくれ、人のいふ時、いくときも、生けらぬものを、なにすとか、身をたなしりて、浪の音の、さわぐみなとの、おくつきに、妹がこやせる、遠き世に、ありけることを、昨日しも、見けむがごとも、おもほゆるかも。

反歌

かつしかの眞間の井見れば立ならし水くましけむ手兒奈しおもほゆ

此の歌にて、手兒奈の事跡は、よくわかるなり。また、奥儀抄といふ書にいはく、これは、昔、下つ總國、勝鹿眞間野の井に、水汲む下女なり。あさましき麻衣を着て、はだしにて、水を汲む、その容貌、妙にして、貴女には、千倍せり。望

月の如く、花の咲くが如くにて、立てるを見て、人々、相競うて、夏の虫の火に入るがごとく、湊入の船の如くなり。茲に、女、思ひわかひて、一生いくばくならぬよしを存じて、其の身を、湊に投ず。云々。

とは、蟲麿の歌を解釋したるまでにて、その言葉も、蟲麿の歌のまゝを用ゐたり。古き書に見ゆるは、右の萬葉集の歌と、奥儀抄とのみなるが、奥儀抄の説は、蟲麿の歌を舗張したるのみなれど、格別の價値なし。されど、古は、蟲麿の歌の傳ふる所が、一般に行はれたるを知るべきなり。

かく、赤人、蟲麿の歌に詠せられ、奥儀抄に説かれて、眞間の手兒奈の事跡は、明瞭なるに、今日傳ふる所は、之と異なりて、手兒奈は、繼母の爲に苦しめられて、身を、水中に投せりといふ。此の俗説の、書に見えたるは、太宰春臺の繼橋の記をもて、始とす。その文、漢文なれば、假名交りに書きくづして、左に錄す。その文にいはく、

東都の東、下總の國に入ること、四十里ばかり（六町一里のわり）、その地を繼里といふ、橋によりて名づくるなり。繼の、名區たること久し。山赤人、橋蟲

生（支那人の姓名の眞似をして、日本人の姓名を短縮す。此の時代の漢學者の惡弊なり。山赤人とは、山部赤人のこと、橋蟲生とは、高橋蟲麿のことなり。）より、このかた、歷世の詞人、皆、之を詠歌せり。何の詠歌ぞ。底胡（手兒奈を短畧して、底胡といへるなり。）を詠歌せるなり。底胡とは何ぞ。女子の名なり。曷爲ぞ。底胡を詠歌する。其の說、未、詳ならず。里人の傳ふる所を以てすれど、底胡、早く、母を喪へり。繼母、無慈悲なり。さるに、底胡、之に事へて、孝なり。繼の里は、海に瀕めり。井水、皆、飲む能はず。唯、一の井あり。寒泉にして、飲料に適す。底胡、日々、之を汲みて、以て、繼母を養へり。こゝに、一人の少年あり。底胡を見て、心、之を喜び、その跡をつけてゆきけるに、門をとざしけれど、詮方なく、底胡の家を窺ふこと數なり。繼母思ふやう、これ、盜人なり。而して、底胡、之が內應をなせるならむとて、底胡を毆ちぬ。底胡、辭をつくせども、許さず。いたく、之を毆ちければ、底胡死なんばかりになりぬ。乃、走り出でゝ、橋下に、身を投げて死にき。里人、之を哀み、取りて、之を葬り、土を封じ、松をうゑて、以て、之を識せり。その橋を

稱して、繼橋と云ひ、その井を稱して、繼井といふ。以て、繼母の惡を懲らすなり。墓や、橋や、井や、今に、なほ、存すといふ。その後、僧空海、東遊して、此にとゞまりき。里人、因りて、寺を作れり。海(空海のこと)の諡は、弘法と云ひしかバ、弘法寺と號せり。後、寺は廢れしが、僧日蓮といふものありて、之を修めたり。今、現に存せり。繼橋は、その寺の下にあり。繼井と、底胡の墓とは、皆、其の寺の東北、百步の内にあり。云々。

春臺は、當時、有名なる學者なりしかど、萬葉集は讀まざりきと見えたり。奥儀抄も讀まざりきと見えたり。唯、赤人、蟲麻呂の歌あるを知りて、その歌をバ讀まざりしなり。若、蟲麻呂の歌と、奥儀抄とを讀みたらましかた、「その說、未、詳ならず、里人の傳ふる所を以てすれバ、」など云はれざりしならむ。春臺、又曰はく、「底胡とは、何ぞ。女子の名なり。」と。女子の稱にして、女子の名にあらざるに、女子の名といへる、その無識なること、驚くに堪へたり。春臺、又曰はく「その地な、繼の里といふ。橋によりて名づくるなり。」と。これ、また、深く考へざる說なり。我が國の古を考ふるに、先、地名ありて、然るのち、山の名、川の名など、出づるな

り。人の名も、地名より出づるもの多く、橋の名などは、地名よりは、遥後れて出づるものなり。即、富士といふ里（今は郡）にある高山を、富士山といひ、そこにある大川を、富士川といふなり。吉野の里にある山を、吉野山と云ひ、宇治の里にある山を、宇治山といふ。葛城の里にある山を、葛城山といふなり。また、そこにある橋を、葛城の繼ぎ橋といふなり。繼ぎ橋とは、兩岸より、板をうち渡して、中央の橋杙の處にて繼ぎ合はせたる橋なり。かゝる橋は、今も、田舍にゆけバ、往々、見る所なり。眞間の繼ぎ橋も、亦、眞間の里にあるゆゑ、かく呼ばれたること、例を推して知るべきなり。

かくいふは、余が創見の説にあらず。江戸名所圖繪、已に、俗説の非なるを排斥せり。その言にいはく、

後世、祠をいとなみて、これを奉じ、手兒名明神と號す。婦人、安産を祈り、小兒、疱瘡を患ふるの類、立願して、その奇特をうといへり。祭日は、九日なり。傳へいふ、文龜元年辛酉九月九日、此の神、弘法寺の中興第七世日與上人に靈告あり。よつて、こゝに崇め奉るといへり。春臺文集繼橋の記に、手兒名

の事を載せたりといへども、その說、里諺によるのみにして、證とするに足らず。

余は、蟲麿の歌、奥儀抄を讀み來て、此の江戶名所繪圖の說を贊成するものなり。口碑も、時に取るべし。されど、春臺の錄したる口碑は、毫も取るに足らざるを知るなり。蓋、眞間といふ里に、名井あり。故に、眞間の井といふなり。名橋あり。故に、眞間の繼橋といふなり。名高き美人あり。故に、眞間の手兒奈といふなり。而して、眞間の手兒奈は、幾千年前の人なれど、後世にいたりては、其の墓も埋沒し、蟲麿の歌、奥儀抄に傳はりしことも忘れ、唯、古の、美人が、身をいさぎよくして、眞間の入江に、身を投ぜりといふ事を、おぼろげに知り居りて、尊敬の念、一方ならざりしなり。而して、浮屠氏の狡猾なる、よく、里人の尊敬する所を知りて、之を、神と祭り、里人の心を服せしめて、益、その寺の信向を得むとはかりしなり。眞間の里の「まゝ」は、繼母の「まゝ」と、相通ずる故、美人の、身を投げたることに思ひあはせて、その事跡のおぼろげなるに乘じ、その美人は、繼母に苦しめられて死せりなどゝ、附會の說を逞しくせるなり。その繼母の「まゝ」より、眞

間の井といふ名もつき、眞間の橋といふ名もつき、眞間といふ地名も起れりと云ひふらすにいたりしなり。さるに、春臺は、有名の學者なるに、おどくも、此の俗説にまどはされたり。物識りを以て、自慢せし馬琴も、此の俗説にあやまられたるものと見え、春臺のものせる説に、少し、色つやをつけたる説、その著、皿々郷談に見えたり。菊池三溪翁が、手兒奈をよまれたる古詩、いと、妙なれども、俗説をとられたり。細川十洲翁も、亦、一篇の古詩をよまれ、丁寧に、序まで添へられたれど、全く、春臺の文より出でたるものなり。かゝる人達は、畢竟ずるに、蟲麻呂のうた、奧儀抄などは、讀まずして、後世の俗説をのみ取られたれば、かく誤まられたるならん。

われ思ふに、手兒奈が、實母を失ひたる後、繼母につかへて孝養をつくしけるが、終に、其の邪見に堪へ兼ねて、身を投げたりとする説も、手兒奈にとりて、あまり、損はなきなり。倫理、修身の教にもなるなり。されど、蟲麻呂の歌、奧儀抄が傳ふる古説の如く、衆人の情に酬ゆるに、一死を以てしたりとするは、啻に、風教に、稗益あるのみならず、古の烈女の心情の、純潔にして、決して、後世輕薄なる人情の

比にあらざるを知るべきなり。

手兒奈は、蟲麻呂の歌、奧儀抄の傳ふるが如く、ひなのはてなる賤の女なりけり。されど、その容貌は、花よりもうるはしく、月よりもあてやかにして、金殿玉樓に、錦繡を纏へる貴女よりも、貴かりけり。その心は、その顔よりも、更に、うるはしかりけり。やれたる麻の衣をまとひ、緑の黒髪をくしけづるいとまもなく、履も穿たず、跣足のまゝにて、遠く出でゝ、水を汲みけれども、玉は、つゝれにつゝみても、玉なり。あまたの少年、その姿を慕ひ、その心をめでゝ、呼ひけり。その一人に、從へば、他の人達の厚き情を如何にせむ。さればとて、我が身は一なれど、すべての人達の情にかなふべくもあらず。美しき女と生れたるは、天なり。命なり。人生は、もと、限りなきものにあらず。五十年の齡をたもつも、一生なり。百年の齡をたもつも、一生なり。妙齡にして死ぬるも、亦、一生なり。夢の如き浮世に、また、何をか惜むべき。もろ人の情に酬ゆるは、我が身をすつるより外に、道なしと思ひ定めたる其の心の雄々しさ。武士が、君の馬前に討死する覺悟と、何ぞ異ならん。後世、袈裟御前が、夫と、母との爲に、その身を殺したるも、眞間の手兒奈の遺風を

擧びたるなり。細川忠興の夫人が、夫と、君との爲に、自害したるも、亦、眞間の手兒奈の餘烈に比すべきなり、我が國の古の女は、かくばかり、情厚かりけり。未だ契りかはさぬ人の爲にすら、情義をたて通して、その身を殺しけり。その誠心は、萬古に傳はりて、泯びざるべし。心あらん人は、一たび、その社にまうでよ。都より遠くもあらぬ路程なるに。

眞田伊豆守信之の夫人

本田信子

會津の役、眞田安房守昌幸、其の子信之と同じく、徳川家康公に從軍せんとて、上田を出發し、佐野に到りし時、石田三成、書を贈り、大坂に助力せんと乞ふ、昌幸、依りて、俄に、志を變じ、上國に通ぜんとす、信之、驚きて、切に諫めども肯かず、父子、遂に、東西に分れ、昌幸は、兵を以て、上田に歸り、信之は、關東に赴けり、初め、信之の夫人、信之に告げて曰はく、妾、女子として、僭なれども、愚慮を以て察するに、房州君の御心計り難し、今の世は、父子兄弟とても、侖慮をゆるしたまふまじ、唯、此の事、肝要に侍らんか、信之、點頭して、出陣せり、既にして、昌

幸、果して、中途より引返し、上田に歸らんと、沼田を過ぎ、使を遣して、城に入り、暫く、城中に入りて休息せんと請ふ、夫人、怪みて、使者に謂ひて曰はく、何故、今頃、家康公を捨てゝ、歸陣したまふや、使者の云はく、何故なるを知らず、唯、俄なる事の由にて歸らるゝなり、夫人問ふらく、豆州君は、御同伴なりや、使者云ふ、左衛門君のみ從はる、夫人、依りて、答へて曰はく、是、定めて、旨趣あらん、身、女子なれども、當城を預り、御留守をまもる上は、舅父たりとも、故なくて、城中に入るゝ事は叶ひがたし、若、強て入らんとならば、先、幼兒を刺し、我も自殺し、放火してのち、城を渡申すべし、さもなくば、城下の市中を借りて、休息あらせられよと、使者、聽きて、大に恐怖し、直に歸りて、復命せんと、辭して、城門を出づる時、櫓樓壁門、兵械、既に備はり、弓砲、儼然、列を正し、守禦、早十分に整ひて、敵を待てる風情あり、且、夫人、薙刀を、侍女に持たせ、自出で、防守を指揮し、其の外、侍女六七人、鉢卷、襷にて打扮ち、かひ〳〵しく周旋せり、使者、乃、歸りて、具に、其の聞見する所を述ぶ、昌幸、沈吟斯須、喟然として、嘆じて曰はく、過てり〳〵、我、其の事を察せざりしは、無念なり、誠に、本多が女

なる哉と感じ、依りて、又、使を遣りて曰はく、我、此の城を取らんとには非ず、唯、孫に逢はんが爲なり、必、心をな勞したまひぞと、夫人、敢て聽かず、令して、城下の市中に於いて、宿舍を設け、有司を出して、諸事を司り、男子は、爭鬪の虞もあらんと、女婢三十人斗を撰みて、鉢卷、襷に、棒を携へ、以て、之を警護せしめ、沼田にて、緩々休息せんと思ひの外、敵中に在るが如く、針の席に坐したらん心地して、食事終るや否や、速に發足し、昌幸、幸村、市舍へも入らず、野原に、陣を設け、休息して、上田に歸る、其の後、思慮し、父子、東西に分れ、人心も、區々なれど、家老、物頭以下の諸臣、或は、異變あらんも斗り難しと、一計を案じ、老女をして、我が君の留守の無聊を慰めんと稱し、諸臣の妻妾子女を集めて、遊宴を張り、饗應せしめ、數日流連、家宅に歸るを得しめず、以て、質とし、之に依りて、家中、一人も、異志を起す者なかりし故、寔に、いみじき振舞なりけり、夫人は、本多忠勝の女、家康の養女とかや、

按ずるに、諸家高名記に、夫人を稱して、明の韓了が妻に比せり、韓了の妻、其

の夫の留守に、老臣呂伯高の逆意を知り、艶語を以て騙し、指を切りて贈り、以て、其の逆謀を止めしむ、韓了の歸るに及びて、即、告ぐるに、故を以てし、遂に捕へて、以て、之を誅殺せしといふ、併、夫人は、韓了の妻の、遠く及ばざる所なり、其の智畧の傑出なる、蓋、婦人に稀なるものなり、昌幸すら、誠に、本多の女よりと歎稱せしも、宜ならずや、

漫録

言葉のしるべ（一）

玉の屋主人

一、同じ詞にして、古と今とはその意を異にし、また、そのつかひざまも、うつす事柄によりて、異なるふしども、多かるを、世上の姫達が、文をものし、古書をよみなどしたまはむしるべにもならむかとて、かつて、師に習ひ、また、書よみし時に、心づきたる言葉の二つ、三つ、とりいでゝ、茲にしるすになむ。

一、今の人は、櫻を見にゆくことを、「櫻狩」といへど、昔は、たゞ櫻を見にゆくことを、「櫻狩」とは云はざりけり。その「櫻狩」といへるは、櫻花の

さきたる頃、鷹狩をすることとなり。鷹もて小鳥を狩ることとは、冬を期とす。夏は用うることを得ず。紅葉の頃にはじまりて、櫻花の頃に終るなり。紅葉の頃は、鷹、なほ、狩になれず、櫻花の頃は、鷹、ものうくなりて、春秋は共におほく鳥をとらざれど、半は、紅葉、櫻をながめ、半は、鳥をかるなり。されど、此時分に狩するを、「紅葉狩」と云ひ、「櫻狩」といふ。狩が主にして、花見は客なり。さるを、後世、單に櫻を見にゆくことを「櫻狩」といふは、古意を誤れるものなり。

一、古今集の中に「思ひかね、妹がりゆけば、冬の夜の、川風さむく、千鳥鳴くなり」とある歌の「妹がり」の「がり」は、「櫻がり」の「がり」とは別にして、許といふ意なり、即ち、妹の家といふ意なることは、誰も知る所なるが、此「がり」のつかひ方に就て、注意せざるべからざることあり。「がり」は許の意なれど、行くに用ゐて、來るには用ゐず。即ち、「親がりゆく」とは云ふを得れど、「親がりかへる(我家に)」とは云ふべからず。

一、「つらゝ」とは、今日は、唯、軒などに垂れ下る氷の柱のみをいへど、古は、通常の氷をも「つらゝ」と云ひしなり。「つらゝ」とは、水の一つにつらなりたるの謂なり。今の氷柱も「つらゝ」なれば、氷も亦「つらゝ」なり。今の人ならば「池の氷」といふべき所を、古人は「池のつらゝ」と云へり。新古今集の、「鶯の、涙のつらゝ、うちとけて、ふるすなからや、春をしるらん」の「つゝら」も、唯、氷の意と解して可なり。

一、二字を連ねて、一辭をなせるに、上下相轉ずれば、大に其意を變ずることあれば、注意せざるべからず。その一二の例をいはんに、「花生」といへど、花瓶のことなり。「生花」とて、花の字を下に持ち來れど、花の枝を花瓶に挿すことになるなり。されど、「生花の業」とはいふべけれど、「花生の業」とはいふべからず。また、「舵取」といへば、「舵を執りて、船の方向を示す人」なれど、「取舵」といへば、「船の舳を左に向けむとする時の舵の取りやう」の稱なり。又、轉じて、舟の左の舷をも「取舵」といふなり。

一、「まゐる」とは、賤しき處より貴き處にゆくことなり。「まかる」とは、貴き處より賤しき處にゆくことなり。「まかる」とは、もと、内裏より下ることをいひしが、後には、「貴人の家」より出づることをもいひしなり。さるに、今日は、賤しき處より貴き處にゆくをも、「まかりてる」といふ。昔とは、全く反對となれり。これ、亦、詞の變遷なり。

一、しま(島)といふ語は、今は、海の中などに、ひとつ、はなれたる陸地をいへど、昔は、陸地の海中に突出したる處(即ち、岬)をも、「しま」といへり。古事記に「島のさき〳〵」とあるは、海中の孤島にあらずして、岬のことなり。

一、「かずまふ」と「かぞふ」とは、その意、似寄りたれど、全く同じからず。「かぞふ」とは、一つ二つと物を數ふることなり。「かずまふ」とは、數へ込むといふ意なり。例を以て示せば、「過ぎし月日

をかぞふれど」とはいひ得べし。「過ぎし月日をかずまふれど」とは云ふべからず。又「片桐且元は賤が嶽七本槍にかずまへられたり」とはいひ得べし。「片桐且元は賤が嶽七本槍にかぞへられたり」とは云ふべからず。

一、「すむ」(住)とは、今は、一人住居することをも云へど、古は、一人住居することは、すむとは云はざりけり。すむとは、夫婦相共に住居することなり。伊勢物語第二十三段の終に、「男、住まずなりにけり」とあるは、即、此意なり。

一、「せこ」といふ詞は、後世、夫といふ意にのみ用られど、昔は、兄をも「せこ」といへり。また、男が親しき朋友を呼ぶにも「せこ」といへり。「せこ」とは、男を呼ぶ親愛の語なり。故に妻たる者が、その夫を「せこ」と呼ぶは、固より、妹が兄を呼ぶにも「せこ」といひしなり。その他、すべて、親愛なる男子を呼ぶに「せこ」といひしなり。其例、萬葉集に多し。くだ〳〵しければ、畧す。されど、男の中にも、夫は、妻にとりて、最も親愛なりし故、後世、もはら、夫を呼ぶ稱となりしなり。なほ、清元、常盤津、新内、河東、一中、大薩摩、義太夫などを、すべて、浮瑠璃と云ひしが、義太夫のみ、最盛に行はれしかど、終に、義太夫ばかりを浮瑠璃といふが如し。

一、「つま」とは、夫婦相互に呼ぶ詞なり。婦は、その夫を呼「つま」と呼び、夫も、亦、その婦を「つま」と呼びしなり。他人の婦をば「め」と云ひて、「つま」とは云はざりけり。さるに、後世、誤て、人

の妻をも「つま」といふに至れり。古人の傳を記すに、「政子は源頼朝のつま（妻）なり」とは云ふべからず。「政子は源頼朝のめ（妻）なり」といふべきなり。

一、「さいくん」とは、漢語の細君より出でたり。細君とは、人に對して、自ら、其妻を稱する語なり。史記といふ書の東方朔の傳に、「還て細君におくる、また、仁ならずや。云々」とあり。さるに、妻君とかきて、人の妻を稱することに用うる人あり。こは、字音相同じき故、誤り來れるものなり。

一、今日、西洋人を稱して、白皙人種といふ。皙も、やはり、白といふ意なり。さるに、今日、新聞雜誌など、往々、誤りて、白哲人種といふ。蓋、皙と哲と字形相似たるゆゑ、誤れるならむ。哲とは賢哲の哲にして、白といふ意なし。故に、白皙人種といへば、意義通ずれど、白哲人種といへば、更に語をなさゞるなり。

一、「田舍にゆく」といふことを、雅文にすれば、「あがた（縣）にゆく」とかく人あり。こは、誤れり。古、あがたにゆくとは、國司などに任ぜられて、その國に下ることをいへり。たゞ、田舍にゆくことは、あがたにゆくとは云はざりけり。

一、こゆる（越る）と、わたる（渡る）とは、意味相似たれど、その用うる所、全く相異り。越ゆるとは、山、坂などを過ぎゆくに用ゐ、渡るとは、川、海などを過ぎゆくに用うる例なり。さるに、「川を越ゆる」など、かく人あり。こは誤なり。「川をわたる」といふべし。川を越ゆるとは、云ふ

べからざるなり。

一、鹽舟といふ語を、今は、海をわたる大船のこと〻思ふ人あれど、あやまりなり。鹽舟とは、川など下す小舟のことなり。しほとは大に對していふ語なり。潮をわたる舟の意にあらず。萬葉集に、「久慈川は、さきくありまて、しほ舟に、まかぢしじぬき、我はかへりこん」とあるは、その一例なり。

一、昔、障子といへるは、今のふすま、即、唐紙のことなり。今障子といふは、昔のあかりしやうじの事なり。その例、枕草子などにて見るべし。

一、つとめてとは、翌朝の意なり。早朝の意にあらず、即、昨日に對していふ事なり。今日に對して、明朝といふ意にはあらず。されど、紀行などかくに「二十五日、鹽釜といふ處にやどりぬ。つとめて舟に乗りて、松島さしていでたつ。」とは云ひ得べし。「今日つとめて旅館をいでたつ」とは、いふべからず。

一、かなしむといふ語は、後世、悲哀の意にのみ用うれど、かなしとは、身にしみて感ずる意なり。身にしみて感ずることとは、悲哀の事のみならず、極めてうれしきことも、亦、身にしみて感ずるなり。されど、古は、悲哀に沈むことをもかなしむといひ、喜悦極りなきことをもかなしむといへり。「愛らしき妹」といふことを、昔は、「かなしき妹」といひしなり。かなしむといふが如き言葉は、西洋にも、支那にも、そのためしなく、敷島の大和國に特有なる妙語なり。

一、くはしといふ語は、今日は、つぶさ、こまやか、おつるかたなしの意にのみ用ゐられど、昔は、うるはし（美麗）の意にも用ゐしなり。萬葉集に、「くはし妹」などあるは、美麗の意なり。

一、にほふといふ語は、今日普通には、香氣の事にのみ見ゆれど、昔は、色にも用ゐしなり。近き例を求むれば、かの宣長翁の有名なる「敷島の、大和心を、人問はゞ、朝日ににほふ、山櫻花」の歌の、にほふは、香氣のにほふにあらずして、櫻花の色のにほふ意なり。

黒澤翁滿と千種有功卿

坂木三七郎

友人松本道別君精華紙上に、近頃黒澤翁滿の文を解釋せらる、翁は實に近世和學者の泰斗なり。忍の鄙にありて、名は一世に鳴る、其學植の深かりしを知るべし。余は舊忍藩の産にして、翁とは同藩同鄉なり。余の先考延方君も、少年の頃翁に就きて、歌學を學ばれし由、在世の時屢ゝ余に物語られたり。翁が千種卿と、歌を論ぜられたる往復文、先考曾、轉寫して余家に殘る。今之を女鑑に寄せて、娘等の覽に供せん、歌を學ぶるゝ助ともならば幸なり。因に云ふ、翁は身の丈大にして、性質温和、弟子は固より家人も、翁の怒れる色を見しことなし。或時翁は、自、屏風を製し、出來上りたるに、子息等戯て、其屏風を微塵に破損したるも、翁は少も怒れる樣子なく、只た戯をやめよと云はれしのみなり

しと。以て其性を知るべし。又人の歌を添作するにも、直に、手を下さずして、口吟數十遍、語路を誦して後、雌黄を加へられたりと。此等は余が先考が、親しく師に從ひ居たる時の實談にして、余に語りたり。倘ほ聞わらバ、翁が一世の傳をも、貴社に寄すべけれども。先づ千種氏との歌を論せられたる文を送る。此の書を翁より先方へ贈られたるに、千種卿は大に論難せんとせられたれども。翁は之が相手とならず、未、彼は歌の眞味を解せずと、一笑に付せしと哉。此ことも亦先考余に語られたり。余が忍潜の今に至るまで、歌道の盛なるは、實に翁が敎化の餘澤にして、老人の中翁の衣鉢を傳へたるもの多し。(千種卿との往復文は總て原文のまゝなり)

いぬものかたり

○懐紙　黒澤翁滿はじめて訪ければ

正三位　有功

千とせへむ翁草こそうれしけれ
　我そのふより香に匂ひつゝ

○短冊　遠山花　有功

山松のこのまにかゝる春の雲
　はななりけりとみしは此か目ぬ

黒澤氏より大坂御代官竹垣三右衛門様御手代
宮部孫八郎え遣し候文

彌御安靜奉壽候、誠に此程は大に長閑に相成、面白事承り有難、其上種々御馳走、重重有かたく奉存候、御尊父様えも、厚御禮

奉願候、扨其節相伺候、三位様御禮金貳百疋指上候間、何卒、可然奉願候、其節も一寸申上候通り、懐紙と短冊貳枚、御添筆被下候處、貳枚とも少々申分有之、切格所持致し候而も、疵物に而は甚た歎ヶ敷義に奉存候、併、最早外に致方も無之候へ共、せめて後學の為、彼の卿の御弁解を承　度に付、別紙に愚案を相認差上候、失禮之様には御座候へ共、學文之筋には揃不申儀に付、偏に奉願候、先は右申上度、早々以上、

千種様御短冊

花なりけりと見しは比か目ゑ‖とあるは、比か目あ‖と讀ねはならぬ所故、左様には讀候へとも、か‖をゑ‖と書事、淺見いまた不知、ろ‖をろ‖と書き、ろ‖を‖そとかくとは、同例ならず、據のあることにや、又千とせへむ、翁ぐさこその御歌の四句の、ゑ‖文字と、結句のゑ‖文字と、二ッの内一ッ餘りて、心聞へかたし、抑、うたは表と裏とあるものにて、此御歌は、菊のことをいひて、裏は翁満の事をいへる御歌なるを、表よしても、裏にしても、ゑ‖文字一ッさしつかへて、心の通らぬなり。試にこれを我そのふも、香に匂ひつゝとすれは、聞ゆへし、また我園生にも、香も匂ひつゝとしても、聞ゆへし、香に匂ふといふ心なるが、かくすへて、何の香に何が匂ひけるといへるも、今の花が、昔の香に匂ふといふ心なるか、かくすべて、何の香に何が匂ふといふ、心の詞なれバ。この御歌には、いかゝに聞ゆ、されど、別に譯あることにや、後學のた

め伺度候。
尚、金子如何樣にして可然哉、不敬に相成候は、如何に付、其儘差上候、重々ながら、宜樣奉願候。

有功卿御文

内々別段申入候、愚詠ども疵物と、先方決定之上は、辨解申とても、畢竟、無詮事歟に候へとも、先々右返答書、如斯に候、一々達し可給候、且又謝物贈給り候へとも、疵物之禮は取候ても、何とも氣濟いたし不申候間、是は返し申度、乍御世話可然、取計可給、賴入候以上。

三位

孫八郎どのへ

先頃愚詠短冊、花なりけりど見しは比か目=此不審の旨承り、是は歟にては無之、可を=と=とも、出來候、左右にはねるには、仁を亡、門を門、禮をれ數をお、能をル、眞草ともよ、个樣にて、いくらもあるべし。道風、佐理、行成等、かなにも相見へ候、大師にも有之候、人も我も出來候、珍らしからぬ樣に相覺候、但し拙筆故、歟とも見へ候哉、亦而々々、また千とせへむの歌、四の句よ文字、結句に文字、余り聞へかね候旨、是は先方聞取、愚意と聊相違候歟、愚意はわが園にも、菊の香に匂ひつゝ、千年へんことの、うれしさとの意にて、わがそのも、かに匂ふとは、申さぬにて候、もし、さやうによまんとならぞ、わが草垣も、またわがむくらにもなど、致べくも、我そのふ、また我そのふにも、香の匂ひつゝ、左に

て聞へあしく、われか身、われが宿など、既に、古人も、大に難じたることにて、香のにほひ、此意は通りたりとも同然候、此旨先方へ申達可給候。

二白、本の意にて、趣意は可聞歟、歌の拙なるは、無論候。

翁満より宮部氏への書翰

彌御安靖奉賀候、然バ、昨日は御使被下、有難奉存候、京都御書の寫、爲御見被下、段々御世話奉掛候段、奉恐入候、扨又献上物御不納、御染筆御召上ど相成候事、何共不穏之義にて奉恐入候得共、貴所樣らも返上仕候樣、被仰下候義に付、不得止事差上申候、何分可然樣、御取斗被下度、偏厚奉願候。全體學文之筋は、互に申試候本意に付、我々同志之心得にて、愚意に落不申處を相伺候處、御氣に相障候哉、何共〳〵奉恐入候義に御座候、且此方にて疵物と決定仕候樣とは、以の外の儀に御座候、然る處御答にて分り候義も有之、尙分り兼候義も有之、右樣の義を互に論談仕候こそ、學者の常と奉存候處、尊大の御當りは憚り可申を、其儀に心附不申段、呉〳〵奉恐入候、右文字の義小子心にて、當時近俗、普通の淺き處を申上候心得の處、至て高き御明解被成下恐入、右に付本解仕候に、文字の義は未だ得落意不仕候、勿論愚の至には御座候得共、御辨解の通り承り候ても、何乃爲の香に匂ひ候事哉、此處何分庭澄仕兼候、右

はほんの貴所樣迄、有やうを申上候、何分前文の次第、多罪、今更致方無之、右此上少しにても、可然樣御取計被下度、呉〳〵此段奉願候、先は右早々如此に御座候、己上、

二月十三日　翁滿

式臣大人

千種樣より宮部氏への御文

過日は芳墨令披見候、彌堅固可被相渡、珍重存候、然は翁滿へ遣候愚詠共、取戻し贈越給落手候、彼是御世話の儀辱存候、短冊は竹垣の芳意にて、御入手相成候旨、〇〇〇宜申入可給候、扨今度の儀は、何も流しに致候樣申給尤に存候小子も同意の儀に候へ共決て遺念無之候、去かし尙に文字聞へ不申由、今一應申度候得共、此上彼是往復は甚煩らはしき次第、また其許にも中にたち迷惑の儀察入候、只是きりの事に候、但返書の序愚意一通り、其もと迄話し申入候、

近來古體歌讀と自稱候輩著述候書に、顯然と、現存の姓名を書記し、其歌などさま〴〵誹謗いたし候を、彼是見請申候、門人などへ示し候はさたしもの事、上木までにいたし驕慢なるは、疵わる歌よりは醜く、名聞甚敷、却人からも去らるゝ者にて、よからぬ風儀と被存候、また當時手爾遠波學流行し、是も餘り片つまりしては、其法に縛られ、手爾遠波を先にして、うたを後にするやうに相成候て、讀む所の歌は、平語の樣なるをいはず、人の疵をあなくることを、專

らとして、歌道の趣意には大に違候半歟。歌は物の哀を知るを體とす、哀をしれど、何等の道にも可叶候得共、貴賤は不論可嗜事に候、しかし、今のやうに理屈ぜめにては、口上に○りて風致なく可相成候、されど、詞のしらべ第一に候、詞一ッにてよくもあしくも、聞ゆるものなり、所謂業平の心あまりて、詞たらずと云ふも、歌の上にてはゆるされたることゝ、被存候。

業平　我かどに千尋ある陰を植つれど
　夏冬たれかかくれざるべき

陰をうつるといふことなかるましきなど翁満は可難と存候

また小町　夢としりせばさめざらましを

是もさまさざらまじとありたき抔と可申哉

また俊成　けふといへど唐土迄も行春を
　みやこにのみと思ひけるかな

此歌暮春とて聞ゆれど、是らも詞たらはぬをそへて聞例にて、立行の立をそへてみるなり

久かたのひかりのどけき春の日に
　しづ心なく花のちるらん

愚詠の、わがそのふにも、香に匂ひつゝの趣意にて候、園といへば、草木あることは、しれたるなり。

古歌にも

　春風の空ふく時は梅の花
　枝のほかにも香に匂ひつゝ

右は愚詠と同格と覺申候、右等の作例猶あるべく候得共、所勞にて、六ヶ敷穿鑿など、

いたしかね候。

又書法之事は、銘々流義も有之候得ど、むさと分難きものと存候、先頃のゑ‖は、あ‖をはねたるにて候、尤俗用に相書不申候へ共、古く相見へ候、大行成卿はゑ‖ヶ様に、長く引れたるも相見候、大師いろは集字と申には、ゑ‖かやうに、上代にはさま〴〵珍敷、書體相見へ候、

歌結句のとめ

何…………にぞありけん‖　片假名め有之候、

み閣せむ　かやうに與したるも有之候

總て、上代之尺牘など、和漢とも草書は、よめがたきものにて候得共、文雅の上大抵おしはかりにても、よみうるものとおもはれ候、ゑ‖文字よめずは、よめぬと斗の間にて可然の處、何かこと〴〵しき尋樣かと存候、尤わからぬ事を尋るは、學問の道とはすることながら、それも尋樣にもより可申哉、既に自らまずき物と決定の上は、たづぬるにも不及儀歟と被存候、凡、祝歌或ひは送別など、人の志したる詩歌など、其主の意にかなはぬも、可有之候得共、それを々難問候事は、人情にあらず、禮儀にもそむき候半歟、此人先書には、御染筆下被候處二枚とも、少々申分有之候、切格所持いたし候而も、疵物にては、甚歎ヶ敷義と存候」「後書には、此方にてはきず物と、決定の樣とは、以の外の義に候、何も左樣の譯には無之」、ヶ樣に有之、畢竟、風流なぐさみ事より、ヶ樣両方の疵を出し候事、古學の弊と申ものにや、翁流は、源氏百首など著し、いとやさしき武夫と

存候、然處、初對面より、議論を玄かけられ驚入候、玄かしまた〱、是も已後の心得にも可相成儀と存候、扨て何くれくた〲しく申述候得ども、愚意一通りはなし申すてに候、必ず是きりにて、先方通達無用になし可給候、翁滿と噛合候樣、ほかへ聞へ候ては耻入候、早々、火中可給候也。

きかずして動くこゝろはわらしがた
うらやましきは耳なしの山
一笑可給候

何がし

高島文鳳女史

文政の頃、江戸の麹町に、高島彌兵衛といへる人ありき。その人ひとりの女をもてり。この女幼きより才かしこくて、深く學の道を好み、書よみ物かくことならひ、また、茶の湯、活花をも學びて、其奥儀をきはめぬ。この頃は、徳川幕府隆盛の時なりしかば、江戸の城内の侍女數百人、女史を招きて其教をうけしかば、其名たかく聞えて、こゝかしこより敎子とならむことをこふもの、六百餘人に及べりとぞ。當時、幕府の儒家を林氏といひて、代々學問の宗たりしが、女子の其門に入ることを許さぬ習なりしに、文鳳の學に志すこと篤く、かつ、その學力も勝れたるをもて、殊に、弟子の中に加へけれバ、世人、皆、之を名譽したりき。

女史、いまだ年若かりし時、父母のすゝめに任せ

て、夫を迎へ、いと大切につかへけるに、ある日、樓上にて酒宴を催し、ことはてければ、女史、自、膳部どももて下るとて、あやまりて足踏みはづしておちにき。夫、樓上より之を見て、物そこねたることはなきかと問ひければ、女史悦ばずしていふ、我夫、まづ器をとひて、わらはのことを心にかけたまはず。かく情なき人とともに、世を過さむことは、願はしからぬことなりとて、遂に父母にこひて、その夫と別れ、ふたゝび、夫をむかふることなかりき。その平生の行をみるに、座作進退いとしとやかなれども、心はいとをゝしくて、物に驚かず。ある時、黄昏の頃、柳原を過ぎけるに、盗人ありて、窃に跡をしたひ來て、隙をうかゞひ、物をかすめとらむとしけるを、女史早くもしりて、己がさしたる銀の釵をぬきもち、盗人の眼をさゝんとしけれど、盗人驚きてたちさりきといふ。

女史が學問技藝にすぐれしと、心をゝしくて、膽すわりたるほどは、男の子もおよばぬばかりにて、誠に感ずべく、また慕ふべきなるが、さりとて、女子に望ましきは、操と優しきことゝにて、あはれに泣く一滴の涙は、劍太刀よりも力するどく、牝鷄の晨鳴は、かへりていまはしき物にいひなすなれど、いかに才學すぐれたるもて、唯ひと言の、おのが心に叶はぬとて、夫を離別し、また、世にも恐ろしき盗人の眼抉らむとせしなどは、餘り心づよきに過ぎて、ゆかしからぬことぞかし。げに、一利あれば、一害の

のがれがたき世のならはしとて、優しきは愚なるがおほく、才學かしこきは、なべて、なまいきなるぞ、うたてき限なる。今の物まなぶ媛達も、よく／＼心あれよかし。と何がしがいふ。

述懷

鹽井ふく子

ある人のいふに人の性質といふものは、もと、そが容貌に似て、誰は何、彼はくれと定まりたる者なり。そは美なるも、醜なるも、おのづからなるものなれば、如何でかりつくりたればとて、かざりたればとて、醜き顔の美しくなることはあらじ。才あるも、能あるも、又生れつきからなり。小式部の内侍は、わづか九歳ばかりにて、めで度歌をよまれ、紫式部は、そが兄なる惟規のいまだ童子なりし折、父が史記といふ書を教ふるを、傍へぎゝしたるのみにて、よくもらすかたもなく覺え、かの白川樂翁公は、十三歳の折に、はや、自教鑑といふ冊子を著し給へり。鴻鵠は、生れながらに鴻鵠、燕雀は、生ながらに燕雀なりと語れるをうちきくに、己がおろかなることをおもへど、かひなき事のうらめしくなりきて、はては、涙さへ、せきあへぬまでにかなしくもなれど、文机の上なるありあふ書どりかひすてゝ、やみなん／＼と思ふまゝにいよ／＼口惜しく腹立たしく、一度はわれとわれを引きさきても、すてまほしくおぼえたるが、又、吾にかへりて、つく／＼と思ひめぐらすに、蜘蛛にはあみをはらざるはなく、蜜蜂には、みつをつくらざるはあらじ。我も人の子人のはら

からなり。なれど、いかでか、人なみの業の、えかなはぬ事のあるべき。たとへ、才の拙けれどとて、能のともしかれどとて、心をだにこめなば、桑の弓の巖をもつらぬくといふ例もあり。むかし文覺といふ上人は、其身の才のつたなきを嘆きて、不動尊へ祈願をかけ、遂に、やんごとなき上人となり玉ひ、又源の頼實公ときこゆるは、歌の道のすぐれぬをかなしみて、住吉の神を頼みて、命にかへんとさへとひて、勵みければ、後には、あはれなる歌人の中には、かずまへらるゝやうなりぬ。されどおのれとて、さばかりに心をこめなば、などか、とげぬといふことのあるべき。はかなき物語をきゝて、あたら心をば挫かんとなしたるおろかさや。かばかりのよわき心にては、なかなかに、行するもおぼつかなしと、机をたゞして、ひもとけど、安積艮齋の文畧あはれめでたき文や。二十八歳より、初めて學びたる人ときくぞ。

縣門の三才女　瑶々舍筆話

清水濱臣

縣居翁の門人いとおほかりし中に、女の歌よみすくなからざりき。殊にすぐれたりしは、よの子、茂子、まづ子の三女なりけり。餘の子紀伊殿につかへて瀬川とよばれ、のちに涼月院とまをされき。は、鵜殿孟一（字士寧、通稱左膳南、南郭の門人）の妹にて、漢文にさへたどたどしからず。からうたよくつくられたり。兄おとゝのざえを、その身ひとつに集めたりと、孟一つねにいはれしとぞ。翁あるやんごとなき御方より、女房の手本ともすべき、十二月

の消息文かきてよと、おほせごとかうふられたるをり、よの子にかゝせられしが、いとめでたくつゞけたりけれど、やがて、其まゝにて奉られけりとぞ。近きころ、芳宜園のあるじ、この消息を、みづから筆とりて、かき清めて板にゑられしもあれば、おほかた人も知れり。歌も、よきがいとおほく、岐蘇路記といふ旅日記、をかしうつゞれるあり。しげ子（又の名つくばおといへり。是は、筑波山はやましげやまといふ古歌によりて翁のつけられしなりけり）は、土岐頼房（通稱新左衛門、御警侍臣）の室なりしが、歌は、よの子よりも、たちまさるばかりなりき。

春のはじめのうた

かぎりなく來れどもおなじ春なれば
わかねてゝろもかはらざりけり

この歌、縣居翁の評に、天暦の比の女房の口つきなりと評せられき。また、

みつになりけるをさな子のなくなれるをり
いはけなくいかなるさまにたどりてか
死出の山路をひとりこゆらむ

たゞ言ながら、心のほど思ひやられて、このうた見るたびに、おぼえず涙ぐまるゝになむ。また、

商人を

わたらひの心ぼそさも知られけり
いとうる賤のたえずくるには

女の歌、誠にさこそおぼゆれ。みづからかきあつめおける歌どもに、縣居翁點合をおかれたるを、故ありて、おのがもとにもたれど、過ぎし享和のみとせ、清くかきあらためて、はし書などものゝおきしを、文化十年の春、つひに板にゑらせたり

き。えつ子は、廿にて身まかれゝば、また、かたなりなることもまじれりけむ。されど、かどあるをと女なりしことは、家集文布をみても知らる。かのあやぬの中なる道行ぶりなどは、おほく翁の筆くはへられしものなり。されど、かいなでのをみなにあらねど、命ながくて、老にいたるまでも讀みいでたらむには、いかゞかりめでたき歌ども、いできけむかし。いとも、をしかりしことなり。また板にゑりたるあやぬの末に、碑文をあげて、しづ子が、身まかれるをりのうたとて、

桐の葉のことよなど人はいふめれど
思ひしばかりやいそぐなるらむ

とてあり。桐のはの、諸木にさきだちてちるゆゑ、ことくゝしてよなき早世かなと、世人はいふならむ。なれど、末の露もとの雫、たゞ思ひしのたがひのみなりとよめる心は、二句、いさゝかいひおほせぬこゝちせらる、後に、おのれ、この碑文（倭文子が墓、深川本誓寺にあり）をみづから摺して藏せるには、

人の世に先だつことのなかりせば
桐のひと葉もちらずやあらまし

とあり。板本とは大きにたがへり。これも、碑にゑるをりに、翁のひき直されしものなるべし。

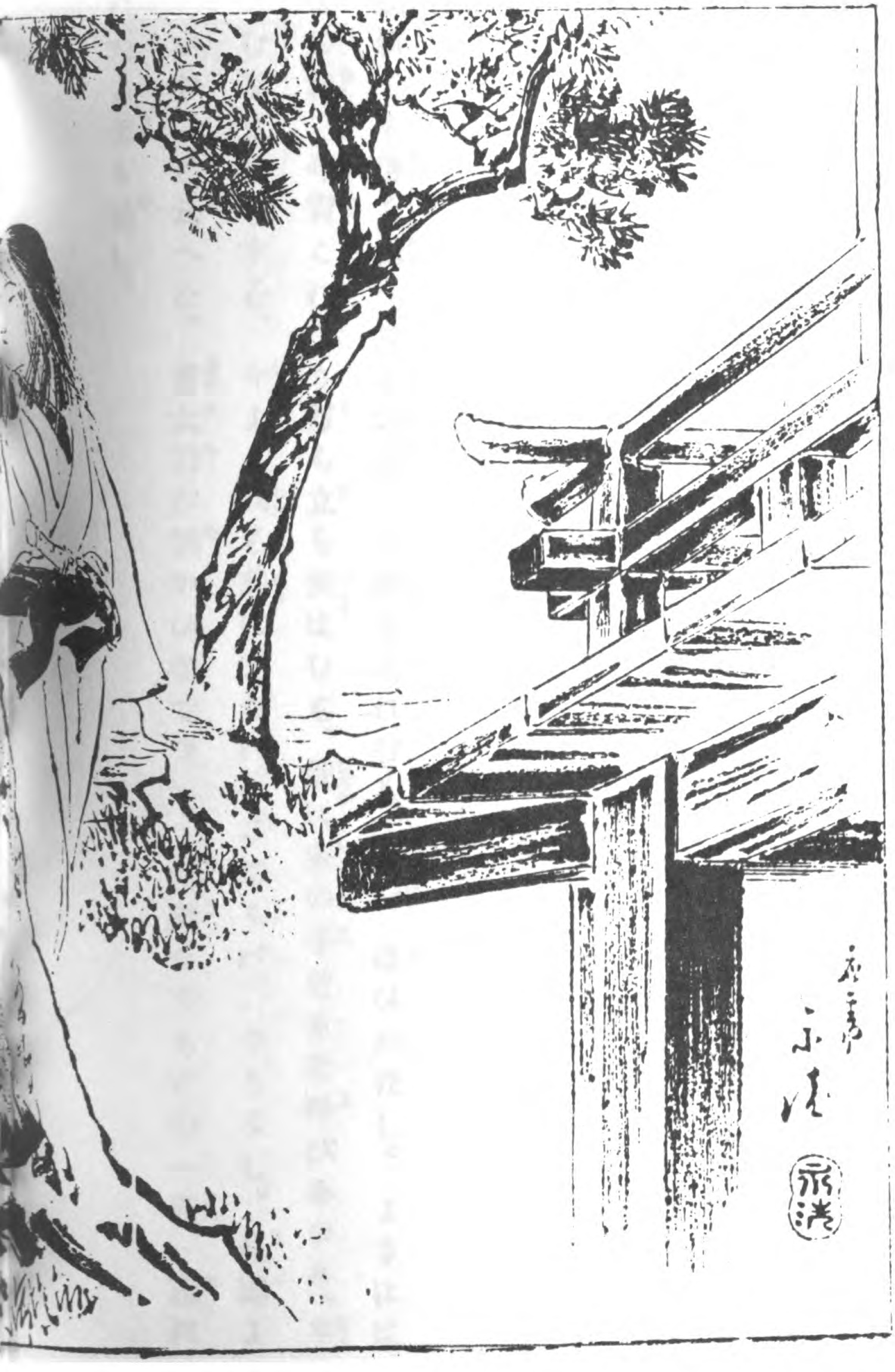
花ふゞき

塩井雨江

その十三

春山春水、笑うて迎ふる元弘三年中興の大御代。去歳より一歳、孤嶋の配所に、御心狭うおぼしめしたる主上も、潛に玉蹕を中國にかへされ、船上山の花間に錦旗の影うつくしく、摩耶城外の春風に勤王の聲勇ましきなど、取り〲聞えけれど、我時來ぬと、踊り立ちたる有井の三郎、いそぎ一の宮に啓し奉り、御代は、おもしろく成りて候。いざ、これより御馬前仕り、船上山の御陣所へ、密に伴なひまゐらせむ。我時きぬと、雀踊りせむばかり、いさみ立ちて、きこゆるに、宮も、おくかたなげのうれしさに、暫時は、とかうの御言葉もなく、唯、三郎や、うれしきぞとのみ仰せ給ふ。

三郎は、兼ねても待ち搆へたる好機、一瞬を遲れむも、又、追ひがたし。よきには急ぐべき世の敎。今宵これより打ち立ち候はむと、俄に家の子どもを呼びあつめ、年來の誓ひ、むなしからずぞ、今より我と共にまゐれ。さなくば、やうなし。此處より去りね。いかにと云へど、皆太刀の柄かひなでつゝ、何處までもとの一言、誰れ一人り遲れたる者も無し。





さらぞを許るさむ。我に隨ひて、忍びやかに、宮の御供し奉れやといひて、三郎は、なは、とかくと思ひめぐらし、人心たのまれぬ亂世、事あからさまにきこえては、途中、如何なる難義あらむも慮られず。人知れず、忍びやかに、出立たむが、よからむと思へぞ、誰れ彼れ四人五人は、とゞまりて留守せよ。宮も、かくあらせられ、三郎も、やがて在るかやうよそほひて、常に變ると、けしきな人に覺られぞ。新參の者まゐるとも、召すべからず。誰訪づるゝとも、謹むべき役義の中ゆゑ、あはぬよしいひて、退けよ。六波羅よりの諜者も窺はむに、油斷なせぞと、萬の事、教へ遣しなどす。

宮は、三郎が妻子を、近う召させ給ひて、親しく、手箱の中なる小やかなる鏡を取り出でゝ、我形見にとて下され、なほ、おん名殘りをとゞめ給ふ御詞懇ろなるに、妻子は、有り難く、かしこさに、ひれふして、唯、そゞろの涙にむせびけるこそ、ことわりなりしが。それより、家の子どもをも、殘りなくめされ、手づから御酒を賜ひて、これより行末を賴みきこえなどしたまふに、誰も、え仰ぎ見るものなく、みな謹みて、此の君のおん爲めには、命をしむまじと、おもふ心の、つゝみがてに、け

しきに出でゝ見ゆれど、宮は、嬉れしげに、さらど疾く行かむと、仰せ給ひて、御坐を立たせらるれバ、三郎はじめ、家の子二十人バかり、一歩も離れじと、引き添ひまゐらせて、忍びやかに、裏手なる磯に出でし、舟に召し給へバ、霞にむせぶ磯の月、風に亂るゝ岸の柳、あはれはふかき船出なり。

離雁あはむとすれど、心なき風雲に隔てられ、片舟よらむとすれバ、情なき白波に妨げられ、一度別れては、二度逢はむ事の、思ふに任せぬ世の中の姿にしあれど、悲哉御息所。いとはしや賤機、千辛の中に、なほ忘れがたく、萬苦の間に、いよ〳〵なつかしく、一心一念あこがれ盡くしたる一の宮の配所の浦。漸々に、流寓漂泊、九死の淵に一生を繋ぎ、僅に、おもふわたりを得て、さすらひよれど、あはれや、其の人は既に去りて、春風春月、こゝも、又、徒らに斷腸ふかき他郷のわたりならむとは、無慘、無情無慈悲、いふかたもなき世なりけり。

御息所の御船の、土佐につきたるは、一の宮の御船の、畑を去りてより、十日あまり後の事なり。されど、さる事は知るべきよしもあらねど、其のわたりなりときくに、嬉れしさ限りなく、遂に見ぬあさましき南海の漁村、なほ久しくよそに慕れに

し故郷を、再度見たらむやうの心地して、姫も賤機も、とかく涙の出づるを覺えず。水夫は、人知れぬ岩影を求めて、船を寄せ、おのれ一人り、先づ磯にのぼりて、此處に尋ぬる浦なりや否やをきはめ、有井の屋敷といふをもたしかめなどして、舟に戻れを、姫と賤機とは、待ちつけて、やよ、宮のおはす畑といふ所にまぎれなきか。あらぬわたりか。あらずば、如何にせむ。はや／＼と、いそがしくせき問ふに、水夫は、うち笑みて、最早御心安くおはせや。うれしくも願ひたるわたりに參りて候を。有井の屋敷といふも、彼方に見ゆる松かげにて候。いざ上らせ給へ、案内仕らむと、先に立ちて、導かむとするを、賤機は押しとゞめ、御息所の方をうちまもりて、のう姫上、さはいへ、親らたちが、打ちつけに行かむは、人の見むさま、きかむ事の、如何ならむ。公けにては、人の入るを許るさぬ配所、思慮なく入りて、やうなき咎めにあひ、返すよしなき禍とならば、いかばかり悔やしからむ。よしや、させる咎めなくとも、多かる人に知られて、はやされむと、宮のおん爲め、御息所のみため、きこえ苦るしきおん名にや侍らむ。父なるが、おん迎へにまゐれるも、知れる者は、唯三郎一人り。くれ／＼忍びてと申して候ひき。諸共にあらずなりて、た

よりなくなりたるも。三郎あれバ、必ず覺ねてこそ侍らめ。なれど、まづ密に三郎にあひて、忍びやかによしを告げなど、よきに取り計らひもし侍らむ。のう姫上。如何にかおぼし給ふらむと、おもひ入りて、御息所をうちまもりたてまつる。

櫻姫も、うなづき給ひて、親らも、えかおもひたることとや。さは、女子の參らむよりは、男子の行かむ方、便機よからむ。のう七郎、退義ならむが、汝れいかにもして、親しく三郎にあひて、忍びに事をはかり呉れよ。汝れかへらむまで、かくて待たむと、水夫に仰せ給へど、げに、さ候はゞ、安全の道に候。委細うけたまり候。いそぎ罷り歸り候はむに、心靜かに待たせ給へとて、とつかは岩をうちのぼり、松林のかたを志して、磯をはせさりたり。

賤機は、何となう心ときめきのみせられて、胸安すからず。岸うつ波のよせかへす短き時のまも、千秋の長く盡きざるばかりの心地して、磯の方のみうちまもれど、姫は、殊更心動きの怺へせさたまはずや、賤機の膝にうつぶし給ひて、えもながめ給はず。はや三時とおぼゆるに、一時バかりは經ちぬらむ。七郎は歸り來らず。賤機は、忍びて岩ほをうちのぼり、かなたを見わたせど、心なき遊絲の、立ち迷ふかげ

のみにて、人は見えず。いつしか日も暮れかゝれど、こは遲しとおもふに、とかも煩しく、思ひまどひも、いよ〳〵にて、御息所は、武文のあらばなどいひ出でゝ、なげきたまふ。

やゝありて、七郎は歸りぬ。あらゝかに、磯の砂蹴かへして、馳せかへるさま、何事か焦だちたらむけしき。船底の波、俄かに湧きかへるやうおぼえて、樣子如何にかとせきとへど、七郎は顏色靑きが中に朱を注ぎ、常ならぬけしき。言葉さへ出でず。唯あらぬ世との一言。船なる人は、はや千丈の底にうち沈められたらむ心地。姫は、あな七郎、もはや何をも告げなど、仰せ給ひて、思ひ込みたるみけしきにて、立ち上らむとし給へど、賤機はおん袖に取りすがりて、いつかなはなさず。涙ながら七郎を見かへりて、宮に恙のましましてか。三郎の心のかはりてか。樣子とくつげよと、いらだてば、水夫も熱涙はら〳〵とふりおとして、三郎と申す者、いかに賴み候ても、謹むべき役義中ゆゑ、對面出來ずと、取りつがせ候て、あはず。止むなく候故、先年御主人の御內意給はる事ありて、遙々都より屆け奉らむものゝありて、まゐり候者なるよし、ほのめかし候へど、さるもの賴みつる覺えなしとて、遂に對

面仕らず。はては兎角申しても、取次ものさへ候はず。詮方候はねど、せめて宮の御安否をも、よそながらきゝ奉りて、亦よき思案も候はむと、漁村の方をさまよひて、玉藻刈る少女のわたり、網干す男子のほとりに立ちよりて、よそ事に問ひ奉るに、折り節しは御様に出で給ひて、ながめ給ふみけしきの見えたるが、此の二十日あまりは、如何に在給ふらむ、見え奉らずなどいふ。賤機は、こゝまでうちきゝたるが、いかに思ひけむ。あな三郎、きゝしには似ぬ嫉き者の振舞や。おもふに、御息所の迎へにとて、武文を都へ上せたるも、なか〳〵に深き企のありてなりけむ。尼ケ崎の難義も、思へば、あやしき事ならずやは。かくては宮の御身もいかにかまさむ。心元なし。今宵は、疾く忍びよりて、宮恙なくておはさば、伴ひ奉らむ。さなくば父の仇なり。主君の仇なり。有井が家の者、あらむ限り、切りつくして、遅れたれども、冥土の御供仕らむ。嫉くや三郎め。唯やはおくべきと、三郎が志しを知らねど、さかしうあれど、少女心の一圖に、それと思ひ込みては、いつかな動かず。七郎殿は御座所の背後なりといふ岩根の下に、舟を寄せて、わが合圖を待ち給へ。呉れ〴〵頼み奉るは、御息所のおん上なりと、細

みきこえて、姫のさはいへ暫時とゞめ給ふを、今日ばかりは、御言葉背むき奉る不忠、許るさせ給へとのみ、うちかへして、遂にうけひかず、父が一生の無念を込めて殘したる形見の短刀、しかと懷にかためつゝ、朧月夜のやみをたよりに、覺束なくも、志したる事の終りやいかならむ。

文林

折蕨　　　　　　　　　　　　鍋島　直大

永き日のくるゝもしらで野に出て
　わらびをるこそ樂しかりけれ　　前田　利嗣

さくらさく山路にいりて思はずも
　初わらびをぞをりてけるかな　　前田　利鬯

家づとよまづ手折けりはるあさみ
　まだ珍らしき野べの早わらび

茶事　　　　　　　　　　　　福羽　美静

しづかなる遊をひとにめでさせて
　千代の聲あり宇治のやまかせ

折蕨　　　　　　　　　　　　水野　忠敬

春雨のはれにし野邊にたちいでゝ

もゆるさわらびをり得つる哉　前田利昭

山かつめ春はつま木をこたりて
まづこそをらめ峯のさわらび　諏訪忠元

河柳

あづさ弓はるになりぬと我が門の
やなぎもいまは萠えいでに鳬　宮地嚴夫

折蕨

こゝかしこ蕨をりつゝ忘らぬ間に
ふもとになりぬ春のやまみち　小出粲

山人のくれしもあれどはつわらび
われこそはをれ萱生がくれに　坂正臣

わかすゝき繁れる中のはつわらび
をれどわが手もきられける哉　大口鯛二

わが山のたにの下みづくむたびに
をりてぞかへる春のさわらび　師岡正胤

寫眞鏡

もの皆の形をたがへぬかゞみにも
うつらぬものは心なりけり　酒井喜雄

旅宿雪

ふる雪にさまだげられて草まくら
たびの日數もつもりぬるかな　佐々豊水

和琪童女君

大藏のみやのはのはのかげよりぞ
赤きこゝろはよゝにかゞやく

正行朝臣の母　　草野　隆道

ふきたてしは丶そのもりの夕風に
　くすの若葉やひるがへりけむ

春夢　　鍋島　榮子

いひ知らずをかしき物は花かげに
　みつる小蝶の夢にぞありける

春浪　　前田　朗子

打ちよする浪ものどかにみゆる哉
　かすみわたれる春のうなばら

春天　　松平　健子

打ちかすみ長閑かりけりこの頃の
　そらのくせなる花ぐもりして

春庭　　小池　道子

友まつと敷きたる庭のさむしろに
　白くもはなのちりつもりたる

春曉　　鶴　久子

花みつゝありき勞れていねし夜は
　老もわけるをおぼえざりけり

春祝　　北島　以登子

君が代の千よ田の松のかげしめて
　のどかにうたふうぐひすの聲

春色浮水　　諏訪　晴子

さえ〳〵し池のかゞみの曇れるは
　はるのかすみのうつるなり鳧

春雨　　三輪田　眞佐子

まつ花にこゝろをそゝぐ小倉やま
　そぼふる雨もうれしかりけり

紫式部　　阿部　優子

さま〴〵の人のこゝろを寫しつゝ
いしやまでらの月のあかりに

中正私言　林　甕　臣

人の心おきては、中正なる、良し。「過ぎたるは、なほ及ばざるが如し。」と、眞言なるかな。この金言。卓言と謂ふべし。中正は偏せず。僻せざるなり。砂糖の如く甘からず。鹽の如く辛からず。玉の如く圓からず。賽の如く、四角ばらざるなり。また、石の如く硬からず。豆腐の如く柔かならざるなり。中正は、眞心の曲尺。實情の規矩なり。酒も、少しは、呑む、良し。過ぐすべからず。牡丹餅も、食へ。たゞ過ぐすなかれ。色氣も、少しは、無くては、成らず。道ならぬ色欲、否し。榮利を欲りし、名を求むるも、少しは、良し。去かし、所以無くして、頭下げ、膝屈むる、見苦し。求めずして、おのづと得たる、良し。求めて走る、何事も、否し。金ための錢の番人、愚の至り。錢無しの聖人氣どり、愚のたぐひ。すべて、正しからざる欲心は、唾しても、振りむくな。目耳ふたたぎても、迷ふなかれ。中正は、僞り飾らざるなり。「花より、團子。」「詩を作るより、田を作れ。」の格言、至極せり。去かしながら、殺風景に、氣負けたる、感心せず。女の「男ぎらひ」など、澄ましをる、また、感服せず。壯き血氣の男が「婦人などは、」と、四角ぞる、反て油斷が、ならず。たゞ、過不及無く、程の宜さが、良きなり。言はずや。世に、「あの人は、程の宜い人。好いた人。神のやうな人。

心よ惚れた人。」

雜報

●皇后陛下廣島に行幸ます　　皇大君は、遠く行幸まして、廣島に駐まり給ふこと久し。大宮城にのこりゐ給ふ　　皇后宮が、雨につけ風につけ、想ひあんじさせ給ふはいかならむ。君のため、國のため、家をも身をも打捨てゝ、海路はるけき韓國よ、夷の奴らを討ちきため、手足身體に重き傷うけながらも、わづかに、玉の緒を繼ぎとめたる武人らがうへ、國民の慈母なる　　皇后宮の御仁慈深き御心には、いかにかけさせ給ふらむ。こたび、　　皇后宮には、久しくみ離りゐ給ふ天皇のみけしきを伺ひまつり、また、廣島豫備病院の負傷者を見給はんとて、いにし十七日朝まだきに千代田の宮城をいでたゝせ、途に三日二夜を重ねて、十九日の夕つ方、廣島につかせ給ひ、すぐに、大本營にまうでゝ、　皇大君のみけしき伺はせ給ひき。なほ、つゞきて豫備病院をも訪はせられて、懇に負傷者を慰め給ひきとなむ。

●常宮周宮兩殿下の御仁惠　　兩内親王殿下が、いまだ、幼稚き御年ぱへなるにも似合せられず、日頃御慈仁の御心深く在しますことは、豫て、浊

れ承はる所なるが、本月六日午前二時頃の事なりとか。目下御滞留遊ばされ居る大磯山内侯爵の別業と、隣合せなる某氏の邸中に、二名の曲者入込み居りしを、別業御警衛の巡査丸山某が見認めて、誰何めたるに、二名は逸早くも逃出したれば、丸山は追跡して海濱に到り、一名と二時間許り格闘ふ中、雙方共、遂に負傷するに至れり。此丸山は、前日、兩殿下海濱御運動の砌、御護衛申上げたれば、御見覺ありしものと見え、此事を聞かせ給ふや、急ぎ、御養育主任佐々木伯爵を御前近く召出さる。伯爵は、何事にやと、即刻推參たるに、平素とは異なりて、とみには御言葉も掛させられず、稍ありて仰せらるゝやう、丸山が今朝負傷したる由を聞く彼は昨日も供奉せしものにて、殊更不憫に覺ゆれば、傷所の摸樣等を聞合せよ。又侍醫をして治療を施さしめよとて、手づから、御手許なる御菓子と、金圓を下賜わらせられしかば、伯爵は、早速右の趣きを傳へ、且、負傷の摸樣をも取調べ、至て輕傷なる旨言上に及びしに、兩殿下には、御氣嫌いと麗はしく、幸ひなりしとの御言葉さへありき。山田巡査は、御憐命の程身に染みて、何と謝し奉らん言葉も知らず、只々感涙に咽びたりといふ。ありがたき御心なりけり。

●皇后陛下恩賜の義脚　歩兵第一聯隊第五中隊上等兵大塚彌一(右下脚中央より切斷)同第二聯隊第七中隊豫備一等卒近藤直吉(左下脚上三分一切斷)の兩負傷兵は、東京豫備病院に於て治療を受

け、已に全癒せしが、曩に　皇后陛下は、其國家のため、不具の身となりたるを憐ませられ、畏くも、右兩兵へも、義脚賜はるべき旨御沙汰あり、製造中の所、漸く落成りしをもて、さる十八日、右の兩人を、同病院の事務室に呼出し、軍醫一同整列の上、松島同院長は、畏くも　皇后陛下の思召に依り、御手元金より恩賜の旨、香川大夫を以て石黒總監へ御沙汰となり、製造せしめたるものにて、石黒總監に代りて授與する旨を申聞かせたり。兩人は感涙に咽びながら、之を拜受し、たゞちに、其場に於て義脚を着けたるに、其矩合もとも好く、歩行自由にて、義脚とは思はれざる程なりき。松島院長は、豫て召寄せ置きたる寫眞師に命じ、義脚を着けたる肖像二葉を撮影せしむ。一葉は　陛下の御手許へ奉呈、一葉は本院に留め、一葉は本人等に下賜されたり。又、當日、曩に平壤の戰に一脚を失ひ、同じく、皇后陛下より義脚を賜はりたる、歩兵中尉軍務課員田邊元三郎氏をも呼出して、右の兩人と共に撮影せしめたりといふ。

●日本の婦人　曩に、我貴婦人たちは、畏くも皇后宮陛下、御保護をうけまつりて、米國大博覽會日本婦人會てふものを組織し、一つには、我日本婦人の手に作れる百工の製品を示し、また二ッには、我婦人の古より今における事蹟を記して、海外の女子らに知らせまくとて、數名の女史達に筆とらせて、編纂せし日本の婦人ちふ文を、英文にして、外國々の女子らに頒ちしに、大に彼らの

間にもてはやされたり。今度、また、我が同胞の婦人にも、この書の中の事どもを知せむとて、國ッ文なるを、大日本圖書出版會社より出せり。今そを見るに、部門を分ちて、總論、治績上の婦人、文學上の婦人、(國文學の起原)宗教上の婦人、一家に於ける婦人、產業における婦人、日本婦人の藝術、現今の婦人(慈善及敎育)の八とし、いつれも懇切にその大畧を解きて、以て、我日本婦人の古今の才學、道德、工藝などの卓越れたる程を示したれど、田村何がしの日本の花嫁といふ書にて、不稽ことどもを聞き、我婦人の上を、野蠻などゝ思ひ誤りたる、彼の女子らが惑を、跡もなく打ち消しゝならむ。誠に良き書といひつべし。唯、男女同權などいふ彼國の女子に見せむとのみ思ひしなればにや。書きし事蹟の、才學、技藝に勝れて、且は、心づよかりし婦人の功績のみを掲げて、我婦人の特色なる。優美貞操の事を、多く識さゞりしぞ遺憾なる、また、伊勢の齋宮、加茂の齋院、常陸鹿島の御齋樣のことがらを、宗敎上の婦人の部に入れたるは、神道と宗教との差別を、一ッにしたるにて、いとわかぬ心地す。されど、是らは、唯、瑛玉の微瑕にて、眩ゆき光輝を隱すに足らす。

●女子高等師範學校卒業證書授與式　去る二十六日、行はれたり。こたびの卒業生氏名、ならびに、祝辭、告辭、謝辭は、左の如し。

女子高等師範學科卒業生(氏名は孰れもイロハ順なり)

兵庫縣士族伊東　きく　大阪府士族池田　好

高知縣士族西川　磐阿　長野縣士族鳥羽まつゑ
靜岡縣士族龍　敏　長野縣平民小穴　いち
島根縣平民神門　とも　靜岡縣平民吉澤　とら
三重縣平民田宮さくね　高知縣士族楠島　譽
愛媛縣士族牧野　榮　滋賀縣平民松井　郁
東京府士族小泉　てる　佐賀縣士族枝吉　鶴
三重縣士族宮川　ゑな　岡山縣平民柴田　德
埼玉縣平民日向　きく

小學師範學科卒業生

新潟縣平民新野　はつ　富山縣平民芳口　八重
和歌山縣士族渥美いはほ

高等女學校卒業生

大分縣平民一法師美譽　福島縣士族石渡　いし
東京府平民初見　岐美　福島縣士族川島　よし
青森縣士族吉町　眞雄　東京府士族田崎　富
東京府士族堤　千世　靜岡縣士族永峯　均
山形縣士族岡田　周　岡山縣士族國分　鎮枝
兵庫縣士族熊谷　富貴　東京府士族安井　龜
東京府士族牧山　定　新潟縣士族小金井玉汝

東京府士族小林　雪
（右明治二十七年十二月二十四日卒業）
東京府平民猪俣　操　東京府平民今村　とら
東京府士族伊藤　わゐ　千葉縣平民石井　ゆき
北海道廳士族石川　いと　東京府平民石川　まさ
佐賀縣士族入谷　輝　東京府平民林　榮
山口縣士族波多野ちせ　山形縣士族羽鳥　苫
新潟縣平民林　梅野　兵庫縣士族濱尾　淑
東京府士族橋本　かつ　山形縣士族二宮　時
東京府士族北條　とし　東京府士族細谷　田鶴
新潟縣士族名兒耶ろく　東京府華族上杉　重子
埼玉縣士族上原　さえ　群馬縣士族大木　千萬
東京府平民大塚　たか　東京府士族大澤　はつ
新潟縣平民大矢　紫岸　山口縣士族渡邊　藍
東京府平民渡邊　見尾　福島縣士族川島　いし
福井縣士族加藤　須直　高知縣士族川久保　春
山口縣士族金子　郁　長野縣士族金原　吉
東京府士族樫村　米　熊本縣士族門岡　郁
東京府平民吉川　喜代　埼玉縣平民吉村　はま

兵庫縣士族谷野　幾久　山口縣士族高山　季美
山口縣士族高山　不二　埼玉縣平民田中　美知
栃木縣士族武田　はる　靜岡縣士族田口　うた
東京府平民田口　信　滋賀縣士族相馬　くは
東京府平民塚越　媄子　山形縣士族成田　よつ
東京府華族成瀬　薫　巖手縣平民村井　よし
兵庫縣士族野口　まづ　兵庫縣士族野尻　幸枝
新潟縣士族九里　きく　東京府士族山高　繁
東京府士族山崎　婦美　靜岡縣士族牧野　靜
新潟縣平民丸田　仲　東京府平民松井　滋
東京府平民松本　壽　東京府平民増田　ます
東京府士族布施　じゆん　熊本縣士族藤村　安子
新潟縣平民小出　はな　埼玉縣平民小能　登久
山形縣士族小倉　喜久　大分縣平民小栗栖　千重
新潟縣平民小林　榮　東京府士族小林　信
東京府士族小林　績麻　岐阜縣平民安藤　あや
東京府士族有賀　小留　兵庫縣士族齋藤　遊龜野
秋田縣士族菊池　てい　東京府平民三浦　元
千葉縣平民滿井　さい　東京府士族峯　ちよ
東京府士族峯　なを　福井縣士族宮崎　さき
熊本縣士族白杉　末　東京府平民平本不見子
山形縣士族百東　つね

西園寺文部大臣祝辭

諸君今日高等師範學科及高等女學校卒業式を擧行するに當り此席に臨むことを得たるは本大臣の欣喜する所なり

願ふに女子の教育は社會の文明を增進するの要素にして風俗の汚隆德義の消長盡く女子の教育に淵源すると云ふも不可なかるべし即ち文明各國か女子教育に重きを置く所以なり

維新以來制度文物の盛なる駸々乎として百事面目を改め所謂一瀉千里の勢を以て遂に今日あるを致せり但し文明は皮相なるべからず人心の內部に根底するにあらされは其基礎固からす而して文明の基礎を固くするには女子智德の進歩に因らさるを得す本大臣は社會を擧けて大に女子教育に重きを措かんことを欲す

卒業生諸君諸君は多年勉强の結果に因り今日其目

的を遂せられたるは尤も慶賀する所なり諸君は他日人の師と爲るの人なり他日人の母と爲るの人なり其任も亦重しと云ふへし諸君は各自に一國の文明を増進し一國の風俗を扶植するの要素たることを永く心に銘せられんことを望む。

學校長秋月新太郎告辭

玆に本校第六回の卒業式に際し文部大臣閣下の來塲を辱くしたり卒業生諸氏は一段の光榮を荷へりと謂ふべし抑々諸氏は多年の苦辛を以て此光榮ある卒業證書を受くるに至る者なり諸氏の喜蓋し固より言を待たす本校職員其他同窓諸氏亦欣喜して措かざる所なるべし然りと雖も諸氏は今日の喜を以て此に滿足を告ぐべきものにあらず自今以往各々其任務を盡し日本婦人たるの名譽を全くするの日に於て始て其喜を極むる者とす諸氏品行已に正しく學術又其修練を經たり然れとも此任務を盡し以て本校卒業生たるに負かざらんことは余か確信して疑はざる所なり諸氏之を勗めよ唯本校現時大修繕を加へ室宇狹隘なるを以て例に照して多數の貴賓を招待し以て此光榮ある諸氏の紹介を爲すを得ざるは聊か遺憾とする所なり

師範學科卒業生總代柴田とく謝辭

今日卒業證書授與の盛典にあふもひとへに校長と師の君たちの賜なり厚き御恵の程いづれのときにか忘れ申すべきいまよりすゝみてはかしこき勅語の御主意にしたがひ力の及ぶかぎり心のいたらむきはみひたすら教育の業にいそしみはてす退いては身をかへりみ心をみがき女の道をつくして深き御恩の萬分の一にむくい奉るべしここに思ひさだめつるひとふしぞ述べて師範科卒業生一同に代り謹しみて謝し奉る

附屬高等女學校卒業生總代永峰きん謝辭

玆に明治二十八年三月二十六日例によりて卒業の式を擧げらる今や我が　皇の御威稜は八洲の海の外までも日の本の國の名まるく輝きわたれる此大御代にあひまつりて今日にも卒業證書を受る我等の幸なにゝかたくへむ

さてもながき年月校長の君をはじめ師の君たちの

ねもころなる御惠は雲井にそびゆる富士の嶺よりも高く底ひ知られぬ渡津海よりもふかければ今更に謝しまゐらすべき言の葉もあらずなむされどいまより學びの庭宇はなるともうけし教のいたづらにならさむやうを心にこめて朝な夕ないそしみつとめて君たちの御惠の千々かひとつを報い奉らんと思ふよしを卒業生一同にかはりてかくなむ

●揖取男爵講話筆記（承前）

女師高等師範學校に於て

男爵　揖取素彦君

モウ一つ申しまするのは學問は、總て心の底を堅固に持ち、外から參りまする出來事には、どうぞ頓着なされぬ樣に、古人も申したことが御座ります

險易一視

といふことがあります、して險易と申しますのは、大層險しい、苦しい、ところに居りましても、亦易らかなところに居りましても、心持は一樣は持たねばならぬといふことで御座ります、どうも廻り目の都合によりましては、前に申す通で、人の一生の中には、思ひよらぬ惡ひことに、出逢かも知れませぬ、其時こそ、この學問の成績の利用が第一で御座りまするから、夫を今日の目の前の事に差附て申しますれば、頃日日淸の事が起り、片附かれた先方の亭主たる者が、遠征に從軍致して居りませう、從軍致した以上は、妻子眷族の世話をすることは、迚も出來ませぬ、さすれど、家の經濟から、總てのことは、悉皆其主人に代り、引受て其留守番を擔任して、ゆかねばならぬ、然る處、家には

年寄の親達も居ります、他の眷屬もありませう、ところが、それぐに仕向を致す經濟向とても、不如意であり、又幼稚なるもあり、又は早學齡に達した子供もゐませう敎育も致さねばなりませぬ、然るに敎育にも、ナカ〳〵骨が折ます、是等のところに出會ひましても其塲を凌いで往かねばなりませぬ、是も生活上のことに、不自由がありませずば、何も心配はいりませぬけれど、若不自由の家にあつたものとすれば、實に留守番に當られたるところの婦人の働いて、ゆかねばなりません、さういふ所になりましては、勉めて倹約を守り、又は勉強を致しまして、夜を以て晝に繼ぐといふ程にして、夜の目も寢ずに働きをするといふ様に、自分の身体を苦しめまして、留守番の任務を盡さねばなりませぬ是も即學問の効用にて、斯ういふ塲所には、斯ういふ御考が、トント極まるから、何も苦になりますまい、こゝを能々心得になれば、何時も立派に家の御世話も屆きませう、どうぞ、そこになりたいと申す事を私は希望するので御座ります、さて又モウ少し廻り目の惡しいところに出會された婦人方の御心得を、一つ申述べて置かねばならぬと思ひます、そこで、私が初めに申します様に、學問は先づ活用が第一で御座りまして、元來世の中の事に、順境と、逆境といふことがあります、逆境といふは、即唯今申す不仕合なことであります、順境は仕合の宜いことで、廻り目の結搆なところのことにあります、

順境に立つ人は何も心配なく、苦勞もなく、一生を濟ますことになりますけれ共、逆境になりますれバ、骨を折りましても、ナカ〳〵其目途の見えぬものであります、目途の見えぬところも、一向自、ヤケ心といふ樣な氣を出さずに、夫を凌いで往かねはなりませぬ、夫に就ても、最今日婦人方の御心得に申上て置きたいと思ひますることは、經濟上のことで御座ります、先つ世上押なへて、經濟と申すものは。充分の家よりは不充分の經濟を持つて居る家が多いのであります、又一體に我か帝國人民の生活の度合を見ますれバ、歐羅巴諸國なぞの、ところと較べて見ると、どう致しても、未こちらの方の生活の度は低いことにて、經濟向も不如意でありま

ます、其不如意のことの一番の難澁に衝き當るものは、即婦人方に多いので御座ります、實に經濟向は歐羅巴諸國と比例は取ぬといふことは、誰人も御承知のことでありまするから、彼是私が申すには及ひませぬけれ共、唯明治の此御代に移りましたは、何となく、あちらの生活の度合の高くて、何も不如意の無い方の風儀が、知らず〳〵這入つて參りましたことでありますから、夫に見習ふ氣味が御座りまする、夫故に又困るものも多く出來るのであります、夫でこゝを取捨折衷と申しまして、能こちらの風は是位なものだ、日本の在來の風俗は是、日本人の暮し方は是、此家の經濟は是、といふことに能心を用ゐさせられて、其度合を外づれない

様にあるのが。誠に肝腎なことであらうと存じます、しかしなから是等人民の生活の、度合或は其國粹保存とかいふて、此國の國體のことをどうぞ、もちつゞけ、維持なさいといふことは、事が大きく當り、一方から申しますれば、婦人方に向つて之を希望するのは少し高逸過ぎるといふ考もあるかも知れませぬけれ共、さうでありますまいと存じ、前に申す様に、婦人方の任といふは、ナカ〳〵重いもので御座ります、一家を持ちてゆけは、一家〳〵の經濟を立てねばならぬ、又教育の任を御受、追々人となられる時分には、子供や、眷屬の教育のこともあるから、即在來の國粹を保持する方のことも、婦人方に取ては一部分の任に歸するものと謂はねはなりません、男子ばかりで無い、婦人方に之を御希望致すも決して無理なことではあるまいと、私は思ひまする、もと國の本は家に在りといふことも御座りまして、順序か御座ります、一家の事さへ治まれは、國を治めることはモウ容易で御座りまする、故に一家の整理の責任は、即目下當校に御座るところの諸君の未來の任務と、私は考へまするものであります、唯是か一通りの考へにて、机に寄つて一生が過ぎられるものと御考へでは、必此任務か盡ぎたとは云へますまい、故に私は、充分なから此事も重ねて申します、斯が、私は廻り目の惡しい所といふより、むつかしい任務に當られた時の心得であるといふ積りで御話を致すのであります、併し

段々私が御話申したことゝ、色々と混雜致しまして、御聽取り難い廉もあるかも知れませぬけれ共、私の考丈のことを、一通り申上まして、皆さんの御聽に入れたのであります、尚此上にも御話を申上たいことも御座りまするけれども、モウ時間も御座りませぬ、あまり長く申すことは却つて御席の妨げと存じ、今日は是で席を止めますことで御座ります、（をはり）

○慈恩如海　我が　皇后陛下の、至仁至慈に渡せら給ふは、普天の下、率土の濱、夙に稔知し奉らざる者もなし、殊に、此回、出征軍人負傷者の上に就ては、惶くも、太く大御心を惱させられ、石黒野戰衛生長官を御前に召させて、滿洲地方なる堅氷は、何時ごろ融くべきや、彼地なる患者は、何れの月か多く歸朝すべきやを、御下問あらせ給へることも、一再に止まらざりき、長官は右につき、三月中旬か、四月の初旬にもや候はんと、答へ奉られしに、陛下には、然らせとて今回の行啓仰せ出されしことなりとぞ、承はる、さる程に、百里の山河御恙なく、廣島御着輦の翌日、直ちに、同地陸軍豫備病院を覽んとの鳳旨を仰せ出されたり、されども、長途の御旅行、玉躰の御疲勞を恐察し奉られ、一兩日御休養の上と申上られて、去廿二日午後一時愈々同院行啓の事とはなりぬ、當日沿道の儀仗、憲兵警官の先驅、供奉の文武官、及び女官、其外の何くれの御次第は、總て他に讓りて此に專ら其の事の要なるものを記さんに　陛下には、石黒野戰衛生長官、佐藤軍醫

總監の兩氏に、最も忝き令旨を賜ひ而後、士官室より下士卒室と順次御覧あらせ給ふ、其の臥床の患者に就せて、御親ら一々姓名、鄕國、負傷當時の摸樣、幷に、負傷の場所等を御下問あらせ、愧くも御手づから疵處を撫させて、堅きことは無きや、苦しきことは無きやと、御尋ね遊ばされ、御辱なくも、速に平癒せよ、全快せよとの仰せあり、之を拜聽する、我が忠誠なる將校下士卒の人々、誰か、聖旨の優渥なるに感泣せざるべき、孰れも感涙に掻き暮れて、云々と答へ奉つる者もなし、又、輕傷にして稍步行に耐ふる者は、庭前に整列せしめ、尊影を拜せしめらる、時に　陛下は、右の患者に對はせられ、名譽ある戰場に臨み、負傷若くは病痾に罹れるに、速に平癒したること、

御滿足に思し召さる、猶之を鄕國の父兄、親戚か聞かせ、嘸かし、歡喜びならんとの令旨を賜ひしに、皆唯だ最敬禮の中に、感泣の涕を啜る音のみ聞えき、其れより、俘虜の患者室にも成らせられ、善く養生して、平癒の上、故國に還る樣心掛くべしとの、大御言を下させられぬ、抑も、敵國の俘虜に、我が負傷者と同一の療養を賜ふ、既に是れ、文明軍の儀表たり、然るを尙ほ萬乘の尊を屈して此の御慰諭を辱うせらる、噫、彼等亦た餘榮ありと云ふべし、宜なり、彼の獰猾たる動物も、亦皆な床上に起坐し、頓首稽顙して、感涙を催はしつゝ九拜したること、慈恩は之にしも止まらず、又　陛下は更に將校下士卒より、人夫に至るまでの患者に、若干の、金員を御下賜あり、且つや、便

殿に御休憩中、石黒長官より御慰みの爲め、御覽に供したる本院及、各バラック病院の撮影をも、御座右の品たるべしと仰出され、猶は連日各分院をも覽そなはさんとの仰せありしが、斯くては、御病後の御疲勞も如何とて、隔日行啓との事を長官より奏上せられしやに承はりぬ、聖恩高き山の如く、聖慈深き海の如し、此の海山の慈恩に浴するもの、誰か山行かむ、海行かばの精感を發せざらんや、

●佐藤夫人　陸軍々醫總監佐藤醫學博士は、昨年十一月以來廣島陸軍豫備病院長に任ぜられ、私立病院順天堂の業務を放擲し、大本營の下に來り、戰地より歸れる患者の治療に盡力し、効績の著明なることは普く人の知る所なるが、其夫人靜子は、爾來能く不在中の家務を經營し、博士をして内顧の憂なからしめ又其女子二人と共に、嘗て赤十字社特志看護婦たるの故を以て、屢々家事を擱き、三人相伴ふて、本邸より二里餘ある赤十字病院へ風雨冱寒を厭ず通勤し、繃帶等の務に服し居るが、頃日又金百圓を廣島陸軍豫備病院に寄贈し、丸形に赤十字の鷹の模樣を表に鏤め裏に佐藤の二字を刻したる襟留を新調し、之を豫備病院看護婦數十人へ慰勞として贈りし由、博士にして此夫人あり、聯璧雙美とや謂ん、

●日高文子女史の篤志　某校の教師なる日高文子は、屢々東京陸軍豫備病院に至りて、種々の品々を患者へ寄贈せし由なるが、特に、去る廿四日は横濱の有志者、數十名を誘導し、共に親しく、

鵠の沼の轉地療養所の負傷病患者を見舞ひ、豫て、同所の患者が、此永日に徒然の樣子を聞知し、小說冊子、數十部を寄贈したりと云ふ、

●明治女學校生徒病院に唱歌す　麴町番町なる明治女學校の女生徒、五十餘名は、一昨日、東京豫備病院の負傷病患者を見舞ひ、整列して、唱歌數曲を謠ひて引取りけり、その、戛玉裂帛の音は、如何に武夫の幽憤を慰めたりけん、

●二月七日年廼舍歌小集

當座競點

小杉榲邨先生撰

閑居

天　　諏訪　晴子

世はなれてとふ人もなきやますみは
つきゆきはなをともとこそみれ

地　　深川　照阿

ひとすぢにうき世へたてゝみゆるかな
ありとむかりのまとのともし火

人　　後藤　[illegible]子

とふひとはおもひたえても月花に
こゝろをよするいほぞたのしき

佳調　　大河内一子

はる秋のつきゆきをのみともとして
うき世にとほきいほぞすみよき

仝　　千野　千[illegible]

しづけさをこゝろとすめる山まどに
たれをまつ風たえすふくらん

前田　利[illegible]

のどかなる春とはなれとみやこへの
人もとひこぬやまかげのいほ

水野　忠敬

世のちりをいとひてすめるこのいほは
　ともとかたらふまつかせのこゑ
水野　鈔子

かたゝあふともさへたへし草のやは
　ふみをともにてけふもくれけり
増山三雪子

筆はあれとすゞりはあれとたゝひとり
　こゝろをすますやまかげのいほ
諏訪　忠誠

あけくれに松風のみぞおとつるゝ
　世にへだゝりしやまかげの庵
青木　修

世をいとふはとにはあらねと山さとに
　すめぞこゝろものどけかりかり
先光　清風

草のとにこもりておいをやしなふも
　み代のめぐみのつゆにこそよれ
川島　宗端

世のちりをよけてすみにしやとながら
　ひとめこひしきときもありけり
佐々木昌綱

山さるの友よふこゑもしつまりて
　ゆふべさびしきたにかげのいほ
鈴木　重信

世の中のちりにけがれぬ草のいほに
　たえずもふくかのきのまつかせ
荻野美左子

しつかにとおもひてすめる山かげも
　あらしはたえぬまつのした庵
河合喜左子

人とはぬすゞしのやのおきふしも

こゝろのまゝのみこそやすけれ

宮木滿勢子

春雨のおともしつけくすみなれて
とふ人もなきいほぞのどけき

●紫式部日記講義　全一冊

長田致孝著　敬文堂書店發行

紫式部日記の、すぐれてめでたきことは、今更いふまでもなし。こを、初學者にも、よく解き得しめんとて、長田ぬしの、ものせられたるを、紫式部日記講義といふ。「此書、もとは書きつゞけなりしを、今初學者の便をはかり、事實と、年月とによりて、段を分ち、そを又小節に區分して、大意を講じ、また古語の解しがたく、儀式、裝束などの知りがたきは、古書を引用して標註となし、またいと解しがたきは、圖をかゝげて、說明の助けとなしたり。」とは、この書のはじめに、著者のそへられたる言葉なり。今、くりかへし見もて行くに、げに、そへ言葉にたがはず。されば、こを讀みたまはんひめだちの得たまふ利益は、決して少からざるべし。

●社交一斑　全一冊

民友社發行

こは、民友社、その發行にかゝる家庭雜誌にのせたる社交上のことがらを、例の如く、とりあつめて、一の小冊子とせるものなり。よみ行かバ、こも、亦、利益なからじやは。

敎の庭

三月廿日兼題　早蕨

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　愛媛縣新居郡大町村　藥師寺琴子

たづねこし花にはあはで歸るさに
　折もうれしき野邊の早わらび

地　埼玉縣秩父郡大瀧村　近藤仲子

打むれてあそぶ春野の手すさびに
　をるもたのしきはつわらび哉

人　兵庫縣加東郡社村　田淵歸子

分け入りしかへさの路も忘られて
　をる手にあかぬ春の早わらび

足びきの山はかすみのたつを見て　磯部つや子
　下もえいづる野邊の早わらび

諸手にも持れぬばかり早わらびを　小野田延子
　はるの燒野にをるぞうれしき

時ならぬ花のあはゆきそのなかに　安井章子
　をるもたがへぬ初わらびかな

降もせず風にもならぬこのごろの　住山幾子
　日よりに似たる初わらびかな

きゝすなく聲をしるべにとめ行ぞ　藥師寺芳子
　春のやけ野にもゆるさわらび

今はとて野邊に雲雀はおちたれど　住山せの子
　つまゝでをしき初わらびかな

家つとにをりてかへらむ昨日今日　奧原ふく子
　長閑にもゆるをかのさわらひ

道ずから手をりて行かん早わらび　平野きみ子
　はるの山路のつゆにぬるとも

かすみたつ春の燒野にきて見れば　碓井信子

もゆるわらびのけぶりなり題

里びとの燒野のわらびかきわけて　碓井　武子
たが家つとに折らんとすらむ

うちつれて雉子すぐ野を行かへり　河野　文子
をる手うれしき初わらびかな

かへりなばみよとて人に誇りてん　羽田三緒子
摘しわらびの數はなけれど

かた岡のあしたの原のかすめるは　永井さい子
もゆるわらびの烟りなるらん

折りとりて家つとらせんさくら咲　久保田りつ子
木のしたかげに生るさわらび

春の野に見るもうれしや若くさに　高橋　政子
まじりて早くもゆるさわらび

嬉しさはそでにあまれり少女らが　高橋千代子
をり摘ためし野邊の早わらび

手折さへあやしきまでにも之出て　藤澤　元子
かすみにけぶる初わらびかな

山かげのおどろか下のはつわらび　大橋てい子
たれにつまれて春をしるらん

梓ゆみはる日にもゆるさわらびは　佐々有節子
いづれよりまづ折はやさなん

手すさびに折りし燒野の初わらび　德永萬壽子
かへる家路のつとゝこそなれ

少女子かこゑする方に來て見れバ　降田　槇子
岡べのわらびもえそめにけり

陽炎のけぶるあたりやさわらびは　師岡千代子
今もえそめしところなるらむ

山かげのおどろが本のはつわらび　南　淑子
ふりぬる雨にもえいでにけり

家つとに折りてや行かん道のべの　梅原ふで子
ゆくてにもゆる春のさわらび

雉子鳴く野をなつかしみ來て見れバ　植木　鋼子
折り拾かだきはるのさわらび

柴人もつみやしつらんはるかせに　檜村美世子
もえそめにたる岡のさわらび

しら雪はあとなく消ゑて飛火野の　上村　高子
霜のうちにもゝゆるさわらび

妻こふる雉子なく野にきて見れは　木下　鈴子

もゆるわらびも今さかりなり

歸るさはおそくなるともいざ折て　木下　本子
家つとにせん野路のさわらび

住み慣し野守が子等もめづらしと　太田　貞子
惜しむさかりの初わらびかな

片山の木々のこずゑはけむりけり　高野　辰子
島のさわらびもえやしぬらむ

見過してあす來む人にゆつらまし　吉田　芳子
あまりにわかき春のさわらび

むらきえし木の下道をわけくれむ　水落とめ子
うれしくもゆる岡のさわらび

けぶりたち忍がおかの早わらびも　吉川　國子
もえ出る春になりにけるかな

かすみ立向ひのおかにきてみれバ　成田　常子
はや萌いでしはるの早わらひ

かすむのをわらび尋ねて分る日は　曾山　道子
きゝすの聲ぞみちしるべなる

むらさきのかすみ立ぬる春の日に　松井　佳子
おなじ色にもゝゆる早わらび

萌出るわがやまさとのはつわらび　吉川　勝子
をるもわすれず人ぞとひくる

うちけぶり長閑き原のはつわらび　根岸　英子
よのうきことを忘れてぞつむ

うらわかき草に雜りてさとの子が　木村　粂子
折る手に似たる野邊のさわらび

はるはると神樂が岡にたづねきて　中島　房子
をるも嬉しきはつわらびかな

遙はるとこゆる山路のはつわらび　神田　鈴子
いざくれぬ間に摘みて歸らん

長閑なる春日のをかにたづねきて　神田　樂子
折るもうれしき初わらびかな

家土產に手をりてゆかんかた岡の　春木　榮子
はるの早わらび今萌ゆるなり

春の野にわらび折る日は老の身も　荒木須磨子
若がへりたるこゝちこそすれ

つれ〴〵の心すさびにふりはへて　近藤　秀子
春のやまぢにわらびをぞ折る

里の子が野べやく烟りみてしより　松原　常子

待るゝものは萌ゆるさわらび

すゞかげに宿はからまし山路なる　野田千代子
わらびをる間に日はくれに鬼

思ひきや吾よりさきにやまさとの　荒川　満子
わらび摘けんひとのありとは

柴人の踏まくもをしみやまみちの　水島　良子
わらび摘つゝ今日もくらしぬ

此岡にはや萌えいでしさわらびを　島田　好子
人のみぬ間にをりてかへらん

古草をかきやるあとにさわらびの　浦島　鑑子
みどりにもゆる岡ごえのみち

雉子なくはる野の野邊のさわらびを　荒井　波子
かたみにつみて友におくらん

霞立つ野邊のさわらび折り取りて　溝口　直子
けふともなはぬ友におくらん

野邊はけふ殘りし雪も消え果てゝ　溝口　寛子
はや萌いでぬはるのさわらび

世にうとき深山のおくの一つ家に　澤田　俊子
はや早わらびは萌いでにけり

年ごとに燒とはすれど早わらびの　溝口　榮子
みどりにいつる岡こゑのみち

うらうらとかすむ岡邊にさとの子が　溝口　秀子
きそひて手折る春のさわらひ

もゆれどもをる人もなき深山木の　梶井　久子
下わらひこそあはれなりけれ

急ぐべき道にわあれど消えあへぬ　吉岡　佳子
雪まのわらびいかで見すてん

咲く花のさかりは今とみやこへの　青柳百枝子
たよりにおくる初わらびかな

遠山にたてるかすみのいろ見れど　新開みちを
もゆるわらびの程も志られぬ

さく花を尋ねてかへるをかのべに　田淵　貞子
萌えいでにけり春のさわらび

山賤がふゆのたき火の何となららむ　村田喜代子
はやもえそめし峯のさわらび

雪きえてやまのかすみの烟るなり　村田美都留
たにのわらびの今かもゆらむ

いつまかと心にかけし早わらびの　海島　信子

うれしく野邊に見え初めに鬼

山さくら咲き亂れにし其れよりも
猶めづらしき野邊のさわらび　海島　定子

萌えいづる燒野の原のはつわらび
をりよき春になりにけるかな　河原崎富尾

家づとにせまじと思ひ早わらびを
誰か道のべにをりてえにけん　津田　鞠子

まれにたに人めも見えぬ谷の戸に
色めづらしく萌ゆるさわらび　毛受　重子

春かすみ立かくせども萌えいづる
わまりは白き野邊のさわらび　久松　富子

嬉しくもけふ萌そめしさわらびを
をりよく野邊に見出づるかな　久松せい子

行分けて折るも嬉しやさわらびは
春めづらしきやまつとに志て　川瀬　清子

春雨のふる野やまべのはつわらび
をり志りかほに萌へ出にけり　永井　良子

何事もおくるゝやまにおくれずと
さわらびのみは萌いでにけり　三原　照子

初わらび歸さの野邊に見いでたり
よきい家つとを得たる今日かな　清水　艮子

谷かげの道のかたへのはつわらび
いとなき暇やをりのこしけむ　矢野　高子

ひるさへの野邊の雪末にも之出て
春をしらするはつわらびかな　重松たか子

今日もまだあそび暮してはるの山
折りしわらびを家つとにせむ　諸井久良子

花の山あそびくらしてかへるさに
をるも嬉しや野邊のさわらび　吾妻ちか子

またやかぬ野邊にも今は萌出でゝ
折を計りにもなれるさわらび　杉浦　糸子

もえいづる燒野の原にうちむれて
わらびをりつゝ遊ぶけふかな　大谷津立子

消え殘る雪まをわけておもうどち
をるも嬉しや野邊のさわらび　池谷　菊子

花かたみあまれるまでに折つめど
こゝろは野邊に殘るさわらび　舘脇萬壽子

春かせにさそはれ出るさわらびそ　田中　麟子

うち手折りつゝ家つとにせん

春風のふきの間にまにうまかしの
　岡のさわらびもえいでにけり　青木　春子

はつはつにもえ出初めし初わらび
　折りてみやこの家つとにせん　志賀　一枝

さくらちる木の下影のはつわらび
　吹ぶきの中におひいでにけり　大海原芳子

霜がれの草のそこにもはるしりて
　もえ出にけり岡のさわらび　木部千代子

嬉しさは里のわらはがつむ手にも
　あまりて見ゆる初わらびかな　畠山千代子

おかのなはしのぶと聞けど春去ば
　忍びかねけんもゆるさわらび　瀬戸えい子

春くればわれしまゝなる野末にも
　ときしり顔に萌ゆるさわらび　江馬　信子

三月廿日兼題　うれしきもの

天　長野縣長野町　城山とき子

元日の朝人に後れず起き出てゝ若水に顔洗ひ硯筆など清めて後朝日のかげうらゝかなる室につゝがなき父母の御姿を拜みたる櫻の咲き初めたればなど二なき友の云ひおこせたるやり水の清き音する方に二つ三つやみを縫ひて螢のとびちがひたる生ひ出でしより心つくしゝ庭の千草のやう〳〵つぼみもちたる雪ふれるあした端居して眺め居たるに小犬のとび來りて狂ひまはれるなど皆うれしく心ゆくものゝ限りなれどとりそへて此の頃は新聞くばりわりくわらはの鈴の音の何となく心にひゞきてうれしきも御いくさの事なにくれと心にかゝればならん

地　岡山縣岡山市　降田　槇子

鶯の初音きゝたる庭のわか木の櫻笑みそめたる久しう音信もなき方よりふりはへてこま〳〵と消息おこせたるつれつれなるをり心隔てぬ友どちのとひ來てくさ〳〵の物語したる雨などの降る日にはことにうれし心ばへ深き文のくだりしとき得たる必ずと思ひし事なし終へたる善き事行ひ得たるをりなどは心の内云はんかたなしまして父母のおの

がなしたる事よろこび給ひたる心地すぐれずとてこもり居給ひし母君のすが／＼しうならせ給ひたる久しく旅の寒に居ましゝ父上のつゝがもなくて歸りたまひたるげにうれしき事の限になん我大御軍の勝ちて大砲とやらんをあまたとりまたはいくさぶねうち沈めあるはおさへとりたるなどと聞きたるをりこそたとしへもなくいとうれしけれ

人　　山梨縣甲府市山田町　名取　正代

故郷をはなれて遠く他國に物學びするをり故郷の父母はらから其ほかかたれかれいかになどおもふ折しもそが許より文などおこせてまめやかなること又これかれ珍しき事どもいひおこせたるはいともうれし學びの庭に日夜つとめはげみて怠りなく定期之試驗もすみそが成績もいとめでたかりし時などはおごりはてるにはあらねど何となうこゝろうれしきものなりやがてそが業をへて故郷にかへりたらん折父母はらからなどいさゝかの恙もなうて團にまとゐにつらなりおのが學びの庭にありしをりの事どもかたみに物語りなどしていとゞ喜び給へる父母の御顔ををがむをりなどはなか／＼にうれしともうれしきものにてをさなきわらはなどの經驗少きものは實に此うれしさにたぐふべきものなくなん

碓井　信子

人の情として誰か事にふれ物に感じてあな嬉しと心に思はぬ者あるさださりながら十人よれバ十色のたとへの如く嬉しきものも樣々ありて相おなじきはなかるらんされどおのが心に嬉しと思ふは子として親にまめ／＼事ふるもうれし兄妹よくしたひいつくしみあふもうれし斯く事ふる時は親の嬉しと喜ぶ顏を見奉るも嬉し友垣より玉章うくるも嬉し久しう會はざりし友に會ふもまた嬉しけれど今又目のあたりうれしと思ふは

かけまくも畏き　大元帥陛下を初め奉り遠征したまふ忠勇なる武士のから國といどみ戰ふ毎に我か軍勝戰と聞ぞいと嬉しきまして戰地にましますに兄君より月に一度の玉章は實に手のまひ足のふみ處を知らず嬉しさの玉章には我々神洲男子の本分は

肌を破らるゝ北風も肌を突く彈丸も何のその忠と勇とに堅めたる赤心を如何でか碎かんや云々又筆末には必ず兄に代りて兩親に孝養をたのむぞよ汝女たりとも兄の精神を心にとめてあはれ後世には文明の賢母となりて第二の日本男子を敎育し給へ云々の玉章は拜する毎に兄君の身を粉になし御國に奉る心の勇しさも知られて嬉しき事の限りになむ

宏野　萩

花咲きみてる春のあけぼのつとめて庭におりたてばあざやかなる氣に心の底までも淸まる心ちしあるは人の書どもかへさぐりあるはふるき世のさまかたみに物語ふなどもうれしおのがつとめをなし終へて後遊ぶことも心地よしや白山遠くへだてしふるさと人にまのあたり遇ふ心地するうれしさは文の便にこそつく〴〵思へ開けゆく世のめぐみはどありがたきものはあらじかしかくもたのしき月日をかさねぬれど己れの指折數ふる夏の日の三十日あまりの休み日もはどちかしや故郷へ立ちかへりぬれど平日居ます兩親のはゝゑむ御顔うちまもり年頃日頃つみためし學の道のくさ〴〵とおのが身のつゝがなかりしことゞもをくまなくきこえあげなどし朝夕またれしたらちねの御心安めまゐらするは上なきうれしきものにこそ

吉田　芳子

徒然なる折へだてぬ友人におどろかされたるまちわびたりし雜誌の其折すこさず到着したる古郷いかにと案し煩ふ折しもたらちねより恙なきことひおこせたるなどはいと嬉し

去年の夏日清鋒を交へしより此方我大皇軍の進むところ草木も靡かざるはなく旅順威海の砦よりさては北洋艦隊に至るまでみなみ國のとなりて朝日のみ旗のかゞやき渡れるぞいとも〳〵嬉しかりけるましして開闢以來國威今日の如く揚がり國光今日の如く輝きわたれるためしなき明治の大御世に生れあひしこそ嬉しとも嬉しき限なれ

梶井　久子

一年の事ども皆去終へて春のいそぎをさへ殘さず

静かに百八の音を聴きたる雪間の若菜摘みもてかへりて母を笑ませたるひな遊に友呼び集へてあるじせし時なども嬉しけれどなほかの吉野の里人より此なぬかやなど告げこし丶花の便りこそたぐひなきものなれまた卯月に郭公の初音きゝたる早苗植うる頃うらなき人のたすけにきたる土さへ裂くといふ暑き日に氷を送りて夕つかたよりそゞろありきはいかになど言ひおこせたるも嬉しからぬにはあらねどなほ夜もいをねずおほしたてたる桑蠶の糸引くべく成りし頃の嬉しさにはまかずまたものよりかへるさ月くまなくさし出で路を照したる秋の山ぶみにはからずたけがりしてかへりしなどは思ひかけねばいと嬉し雪いと白う降り積りたる夕火桶抱きて徒然わぶるにたまあへる人のおとづれたるはふまゝくをしきもの丶さすがにうれしまたかぞいろはあるは師の君の笑顔などはいつ見ても嬉しきものなりちごのまたなく慕ひまつはりたるは心急がる丶折もなほふりすてかだしやまた物の本に赤き紙帖りたるを委しく言ひきかせたる人古の賢き女の事を物がたる人などの殊にうれしきは問ひがちの身なればにやまたいと難く思ひたる試驗をかつ／＼終へてそのしるしなど與へらる丶日あるは同窓會などにふるき友どち打集ひたるあるは海山遠く隔たりし人より隔てぬ文のたよりあるは外つ國の新聞に御國の事をほめて書いたるなどは折をいはず我もひともいかで嬉しからぬかはされど御軍のかちを知らせたる新聞紙の號外ほど世にうれしきものはあらざるべし

河田いし子

老たる兩親の病の床にうちふし給ひしに日あらずして心よくならせ給ふ時また女子のみこもりて月みちやすらかにふぐならぬ小兒分娩せし時など嬉しきものは世の中にあまたあれどこたびのしなとのたゝかひにうち出すつゝの音は百万のいかつち一時に落る如く雨あられと飛くるたまもいとはず群かるてきの眞たゞ中へきり入て萬死の中の一生を得ていた手も負はずすぐれたる手柄せしますら夫たちの其ありさまを文して送れるを兩親妻

子の取手おそしと封おしきりいかならん音づれぞとよみくたす其時は手の舞足のふむところもしらぬ嬉しき事皇御軍の向ふまに〱くがに海に連戰連勝して萬歳の聲は天地の間にみちわたりぬるかかゝるかち軍は世界は廣く萬國は多しといへといまたゝぐひありともきかずこれ皆御國の爲君の爲に命をさゝげ勇みすゝめるますら夫たちの力によるはいふ迄もなけれど恐れ多くも我

天皇々后兩陛下の御賢明に渡らせられ大御めくみの深きによれは四千萬の同胞の嬉しき事たとふるにものなく今より後は朝日の御はたの光りいやまして外國々の人々もうらやましく思ふ迄とみ榮えゆく我日の本の國のほまれこれにこす嬉しき事はあらじかしつたなき筆にいかて〱かきつくされん限りなき嬉しき事にこそあれ

吉岡すみ子

飛鳥川きのふの淵は今日の瀬とて浮世の事はげに定めなき者になんましてうれしといふも悲しといふもたゞ世の中の人の心のさまにしあれど昨日うれしかりしことも今日はうれしからぬもありけさかなしかりし事も夕べはさのみならぬもありされど其折はげにかゝるうれしきものは世にあらじかゝるうれしからぬものまたとはあらじいつれもその限とぞおほゆめり我をさなかりし折長閑なる空に雲か霞かと見まがふ斗に咲き揃ひたる花の盛り父君母君に伴はれ忍か岡より向島へ行きぬるに花の色香など露目に入らずよしや見ゆるも何とも思はで只おもひ〱のいでたちして出であふ人の中にわれもよき衣きてまじりつると歸りのほとにはよきものの乞ひ求むるとのうれしさのみになんかくて淺草寺の鐘も入相告くる頃となり家路につきし道すがら父と母とにひたすら乞ひまゐらせて彼の中店にておのが丈ほどの人形を乞ひ得し折の嬉しさげにたとへんにものもなしそれよりはいかにして家につきしかいかな所に行き何を見つるにさへ覺えす只其人形を抱きしめて伏とに入り朝はまだきに起き出て急き學校にゆき歸りの道さへ中々に心せかれたゞうれしさに堪へかぬる計なりしが思

へむげに暮たはしの身の上なりきかくて年月すぎゆけむかく計嬉しかりしものうちわすれまたひときはとおもふむかりのもの出で來ぬそもまた程なく失せぬ左はあれどいづれの時にも必上なしとおもふ計の嬉しきものはあるなりさてけふ此頃わがむかしの人形にまさるとも劣るまじくおぼゆる者は外ならず春の朝秋の夕つゆのひまだに忘れ兼たるいと親しきものゝはるかなるゑかもはまれある旅にうちいでぬるが心こめたるたよりはど世にうれしきものはあらじかし人なき窓の下に幾度となく繰りかへしまきかへすその袖に生時ならぬ雫もかゝりぬべし讀みかへす口許には得ならぬ笑みもたゝへぬべし悲しきにもうれしきにも袖をうるはすは女のならひながら悲しき折の涙は必あつしとにもあらねど嬉しさ餘りての涙こそ實に又なきあつき者になんされど我が涙の程よりはかるもこれをこそ今日此頃の上なき嬉しき者とはなすなれさりながらすぎにし事をおもひまはさむこれもまた年のうつるまにはあはれあぢきなき事をしもかく上なくおもひ居つるよとおもふ頃もありなん其折の思ひ出筆にかくはものしつ

田淵　歸子

世の中に品こそかはれうれしきもののさま〲有る中に去年より今年へかけての如く度々うれしとおもひし事はあらずそはこと〲しういはてもしるき御軍事なり千里へたてし海の外に新なる日の本の出來んとはわらはどもの夢にだにおもはさる事なりしに道なきえびすと戈まじへしよりいまだまけしといふ事一度もなく戰へば必ず勝ちてとら臥す野べ千尋の海に日の丸の御旗朝日の影に打なびきぬと聞くうれしさたふとさたとふるに物なしそか御軍のはしに加りし兄弟のすこしにてもいさをせしと聞きてはそのうれしさよろこばしさなか〱わらはの如き筆に及むずなん

田淵　貞子

おのれ等兄弟あまた有るに誰ひとり大御恵の萬分一だに報ひ奉るものなきをなけき居しにはしなくも去年醫となれる兄上の三等軍醫にあげられ廣島

なる病院に勤給ゐしが去る月某の御軍に從ひいさましくから國に渡り御國の爲つくすことゝなりしに幾もなくまた次の兄上の兵士に召されてこれもまた御軍に從ひ今度一等卒にあげられぬとて文おこせ給へりわらは等いまゝでうれしとおもひし事もまゝありつれど今度のごとくうれしとおもひし事始なければ女鑑は八十三號うれしきものゝ文にかへてありしまゝをしるしぬ見る人ふみのつたなきをゆるし給へや

佐々有鄰子

今日の試けんに及第せる鶯のはつ音今朝まで解かねたる書の今宵とけたる文机の上に硯墨筆の整列に窓の前の梅花の散り來て香をそへたる征淸從軍人より野戰郵便の書狀のつきたるはことに雪にあられに身をまかせ陸戰に海軍に旅順口の景に威海衞の大捷にとり〴〵の目ざましき筆の命毛かぎりなく書綴りてあるなるべしと集配人よりとる手もそこ〳〵に封皮をひらかぬ先に心うれし鼠のくりやのもとに夜半までさわぎて夢もむすばぬを猫の一聲にかげだに見えずなりぬるに山月高くたち登り板戸にさし入る影も又うれし

田中　麟子

世の中にうれしき物はさま〴〵あれど人情程うつりやすき物はあらずをさなきには年の暮よりゆび折り數へて一月をまつかざりもうれしく親に遠くはなれゐてたま〳〵あひけるもいと嬉しこれらは世の常の人情ならんさりとてこぞの度よりおもひもかけぬ征淸の事おこり始めの程は日本は小國支那てふ國は大國なり勝利の程もいかゞあらんと數ならぬ我等も心安くは思はざりしに新聞紙の號外にて大勝利を知りたりし時にぞいとうれしかりけれかしこくも大君は聖德にまし〳〵軍人は將校兵士ともに忠勇にして武烈の大和だましひをあらはし高千穗の瑞穗の國の流れくむ我日の本の光り輝き日の御旗は今ぞ敵國の旅順とやら威海衞とやらにかゞやきわたり外國の人々もうらやむまでよなりぬ近きほどに北京城をせめ落し凱戰の砌り天皇陛下にも勇ましくあづまの都にいとやすらけ

くは平座あらせられたまひいくさ人も凱歌をうたひ勇ましく歸朝のをりこそこれにまさりてうれしきことはあらめれとぞ

四月兼題

五日
- 歌……雨後花
- 文……春の山ぶみ

廿日
- 歌……水邊山吹
- 文……女子の衛生

學園

一首の意は、世の中のことが、思ふまゝにならず、堪忍の心もつきはてゝ、斷然世を捨てゝ出家し、山に入りたれども、世は益澆季となり、人臣として君を蔑みし、逆意を恣にするものども彌多くなりて、餘所ながら見て居ることも出來ず、再山を立ち出でゝ、還俗をなし、處々方々に艱難辛苦をして、迷ひさまよひ行くも、たゞ君の御爲ばかりなり。我が身一つは、出家して山に居れば安樂なれども、天皇が、逆臣の爲にあるまじき困難をせさせ給ふを見かねて、此の如く國家の爲に、みづから我が身を苦しめて、心力を盡すことであるとなり。

一天萬上の天皇にましませば、九重雲深き處、金殿玉樓に住ませ給ふは、當然の御事なれども、一朝逆臣起こりて、一時天に勝つときは、天皇も種々云ふべからざる艱難辛苦をせさせ給ふこともなきにしもあらず。既に、後白河上皇の如き、安徳天皇の如き、後鳥羽上皇土御門上皇順徳天皇の如き、又、後醍醐天皇の如き、あるまじき艱難辛苦を、備に嘗めさせ給へり。既に此の如く、天皇は蒙塵し給ひ、逆賊は獸威を恣にする時節となりて、晏然として之を餘所に見るは、人臣の義に非るなり。然る時には、士も農も工も商も、神官も僧侶も、皆其

の難に赴かざるべからず。若之を度外視して、忠義を勵まずば、たとひ手づから干戈をとりて向ひ承らざるも、逆臣と何ぞ撰らばん。御醍醐天皇の時、北條高時逆意を振ひ、天皇大に困難し給ひしかば、藤原師賢卿は、一旦世を捨てゝ山に引き籠り給ひしかども、君の難を見るに忍びず、奮然として山を出で、再還俗して、東奔西走、碎身粉骨して、忠義を盡くし給へり。君の、難にあひ給へる時は、正に誰もかくあるべきものぞかし。

境部宿禰老麿

たゞなめて泉の川のみをたえず仕へ奉らむ大宮所

たゝなめては、泉のいにかゝる枕詞なり。其は楯を並べて弓をいると云ふ意より、いにかゝるなり。○みをたねずとは、水脈の絶えぬが如くと云ふ意なり。○一首の意は、和泉の國にある泉川の水脈は、幾千代經ても絶ゆることなきが、其の絶ゆることなき水脈の如く、吾はいつ迄も生きながらへて、永く久しく此の天皇のまします大宮所に仕へ奉らんとなり。

天皇は、實に父の子を愛するが如く、臣民を愛撫せさせ給ふことなれど、親しく

朝廷に仕へ奉るものは、實に千年も萬年も、富士山の崩ゆる時なく、大海の涸することなく、いつまでも仕へ奉り度しと思ふは、君を思ふ誠心の深厚なるなり。然れども、天皇は親しく朝廷に仕ふる人と、又仕へざる人と、差別をし給ふことなく、皆同じことに思ひ給ふことなれバ、親しく朝廷に出で仕へずとも、常に朝廷に在りて仕へ奉るが如く思ひて、何事も行ふべきなり。各怠ることなく、其の職業を勉むるは、即天皇に仕へ奉る臣民の務なれど、各其の務をさへ勉めなバ、天皇も亦悦ばしく思し召し給ふなるべし。是ぞ、臣民の、すべて大宮所に仕へ奉ることにはなりける。

海犬養宿禰岡麿

御民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらく思へば

天地の榮ゆるとは、世太平に治り、文物燦然として、今日の如く旺盛なる時を云ふ。○あへらくは、あへるにて、逢ふことを云ふ。○一首の意は、今の大御代は聖明なる天皇上にまし〳〵、賢良なる宰臣下にありて、政治其の宜しきを得、法度時に協ひて、世は太平に治り、人臣は輯睦し、文物は燦然として、足らぬもの

なく、實に天地の榮ゆる時節に逢ひたるなり。是を思へば數ならぬ我が身が、早く死せずして、今まで生き延びたるしるしありて、喜ばしく嬉しく樂しきことよとなり。

古戰國亂離の世を考ふれば、朝に父子夫婦兄弟朋友、一家の中に團欒したるものも、夕には處々方々に流浪し行き、或は父を討たれ、或は子を先だて、夫婦兄弟處を異にし、朋友互に干戈を取りて戰場に相見、昨日の味方は、今日の敵となる有様なれば、夜は更なり。白日と雖も、近き處だに往きかへる事容易ならず。故に諺にも、老いては身の死なざることを嫌ふとさへ云ひたりきとぞ。然るに、明治の大御代の今日は如何。さるあさましき世の有様は、夢にも知らず、花に戯れ月に浮れて、何一つとして不足を感ずることなし。實に天地の榮ゆる御代と云ふべきなり。是皆叡聖文武にまします、天皇陛下の御鴻恩なれば、臣民たるものは、古の戰國の世の有様を思ひやり、今の世の太平の樂を樂みて、皇恩の程を忘るべからず。蓼食ふ虫は辛きことを知らず。何事も物に馴るれば、其の有り難きことをも忘れ易し。此の太平隆治の御代に生れ、皇恩の有り難きことをも顧みず、

返りて不足を唱ふるが如きは、實に鳥獸にも劣りたるものぞかし。

讀人知らず

君が代は千代に八千代にさゞれいしのいはほとなりて苔のむすまで

さゞれいしとは、小さき石なり。小さき石の大いなる巖となるには、幾千萬年を要するか、計り知られぬものなれど、かくよめるなり。○一首の意は、我が天皇陛下が知しめす御代は、千代に八千代にして、恰も小さき石が大いなる巖となりて、而して苔の生ずるまでかはらせ給ふことなし。則天地のあらむかぎりは、幾久しく榮えましますことぞとの意を含めたるなり。

天祖天照大神の、皇孫瓊々杵尊に宣り給へる御言に、寶祚の隆えまさむこと、天壤と共に窮りなかるべしとあり。此の大御言は、唯何となしに宣ひたるにはあらざるべし。又皇孫を愛し給ふより、唯其の末の久しからむことを祝ひ給ひしのみにもあらざるべし。又想像的に宣ひしにもあらざるべし。又獨斷を以て明言し給ひしにもあらざるべし。是は、必寶祚の天地と共に隆えますべき故よしありて宣ひしことならむと、推察し奉らるゝなり。其の故は、此の國を造り創め給

ひしは、大神の御父にましませり。此の國土に住ひて、皇孫に仕へ奉る人民は、大神の御兄弟、或は其の御子孫より分れたる支統のものどもなり。支統のものが正統の君に仕へ奉るは、天地間の常理にして、情義も亦然らざるを得ず。故に此の國土に居住する人民は、如何に數多になりたりとも、如何に薄情になりたりとも、此の常理、此の情義を破るごときことは、天地のあらむかぎりはあるべからざることなり。已に此の常理情義を保維する以上は、寶祚は、假令隆盛に趣き給ふことはありとも、衰頽に傾き給ふことは、決してあらざるなり。此くの如く國を創め給へることの宏遠に、德を樹て給へることの深厚なればこそ、皇孫を降して君臨せしめ給ふ時にあたりて、祝ひ給ひしなるべし。されば、海外諸國の君主は、常に世態と共に變遷改易すべけれども、我が大日本國の皇室は、天地のあらむ限は、決して變らせ給ふことなきぞかし。臣民たるものは、此の譯を能く心得て、益〻皇威を發揚し、皇運を扶翼せむことを勉めんことに、注意せざるべからず。

山上憶良

白銀も黄金も玉も何せむにまされる寶子にしかめやも

一首の意は、白金も黄金も玉も、大切なるものにて、是なきときは、忽困窮に陥ることなれど、人の身に取りては、いとも〳〵尊きものなり。されども子なき時は、自分の跡を相續せしむる事も出來ず。又如何ほど金銀珠玉を積み蓄へても、之を讓るべき子なければ、死して後には、何の益にもならず、されば金銀珠玉も何にかせむ。唯萬の物にまさりて大切なる寶は、子に如くものなしとなり。

世の中の人の望も、種々に多きものなれども、其の結極は、我が子を成長せしめ、優れたる人となし、榮かえ行かむ末を見て、老後の樂とせむと思ふより外にはなきものなり。されば、人にして子なき時は、其の樂、子あるものゝ半にもあらざるなり。假令金銀珠玉を積みて、北斗を支ふる樣に富貴の身になりたりとも、若子なからむには、何にかはせむ。貧賤にして漸く今日を送るものなりとも、子あらむには、其の樂、富貴にも勝りぬべし。凡人に貴きものは、恩愛の道なり。人に恩愛の道なくば、禽獸にひとしかるべし。而して其の恩愛の道は、子によりて起るものなり。万のあはれは子ゆゑにこそ思ひしらるれと、古人も云へるが如く、

子持ちたる人と、子生まぬ人とは、其の情の厚薄、大に差あるものなり。其は皆我が子の愛よりして、おのづから人にも物にも及ぼして、薄情なることなどは、敢てなしえぬなり。故に子の爲には、恥をも忘れ、をさなくもなりぬべし。世の中の親たる人は、貴きも賤しきも、おしなべて皆此の如く、子をのみ大切に思ふものなれば、子たるものは、決して其の恩を忘るべからざるなり。

紀貫之

世の中に思あれども子を戀ふる思にまさる思なきかな

戀ふるとは、戀ひしくおもふことなり。○一首の意は、此の世の中に居ては、種々樣々の思は絶えずあれども、我が子を戀しく思ふほどの思に、まさる思と云ふものはなきものなりとなり。

凡、人として思のなきものはあらず。或は興業の思あり。或は成功の思あり。或は名譽を思ひ、或は利益を思ふ。立身を思ふ人もあれど、出世を思ふものもあり。千種萬別、擧げて之を云ふべからず。然れども、親として子を思ふ思にまさる思は、決してあるべからざるなり。風の吹くにも雨のふるにも、寒きにも暑きにも

拜啓益御盛大奉賀候引續き御引立を蒙り辱く深謝仕候陳は會計主任者氏名及使用印形供貴覽候間將來は乍御手數金錢御受拂の事は勿論會計上の御用は必下名の者へ御宛被成下度且金錢出納は左の印形を以て本社の證と御認め被成下度此段得御意候草々敬具

會計主任者
成澤唯次

明治二十八年三月

國光社圖書部

女鑑第八十二號目次

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證出さず金員領收の上は直ちに女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送の附事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月二回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿八年三月二十五日印刷
同　年三月二十六日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同　編輯人　山根勇藏
同　發行所　國光社

(明治二十四年八月八日內務省許可)
(印刷所　東京國光社印刷部)